

2016年4月1日

みずほディーラーズアイ (2016年4月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 109.50 ~ 115.00

国際為替部 為替営業第二チーム 高田 裕

■ 先月の為替相場

3月のドル/円は前半に下落するも後半にかけて反転。往って来いの展開。

1日、112円台前半まで下落したドル/円は、前日に中国人民銀行が預金準備率を引き下げたことを背景にリスク回避姿勢が和らぐと113円台後半まで回復。2日は米2月ADP雇用統計の市場予想を上回る結果から一時月高値となる114.56円まで上昇したが、米金利低下も相俟って113円台前半まで押し戻された。3日は114円台前半まで強含んだものの、米2月ISM非製造業景気指数の冴えない結果に113円台前半まで下落。4日は注目の米2月雇用統計で、非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回り、発表直後は114円台前半まで上昇するも、平均賃金が2014年12月以来のマイナスに落ち込んだことで113円台前半まで急落した。

翌週7日は113円台後半でオープンすると、8日は大きく落ち込んだ中国2月貿易統計を受けて112円台後半まで下落。9日もリスク回避の動きが継続し112円台前半まで値を下げた。10日はECB理事会で決定された追加緩和の内容が市場予想を上回る内容となると、一時114円台半ばまで上昇。しかしドラギECB総裁が会見で追加利下げに慎重な姿勢を示すと反落し112円台後半まで値を下げた。翌11日はリスク回避ムードが和らぐとドル円は113円台後半まで回復した。

翌週14日は方向感に乏しい値動きとなるも、15日は日銀金融政策決定会合で現状維持が決定されると113円台前半まで反落。更に米2月小売売上高の前月分の大幅下方修正が嫌気され、112円台後半まで値を下げた。16日はFOMCで政策金利見通しが大幅に引き下げられ、更にイエレンFRB議長のハト派的な会見からドル/円は112円台前半まで下落すると、17日もドル売りが継続し一時年初来安値となる110.67円まで値を下げた。18日は買い戻され111円台半ばで越週した。

翌週21日から23日にかけてはサンフランシスコ連銀をはじめ複数の米連銀総裁からタカ派的な発言が散見し利上げ観測が台頭するとドル/円は112円台後半まで上伸。24日はイースター休暇控えポジション調整等を背景に底堅く推移すると、25日は薄商いの中、米10～12月期GDP(3次速報)の上方修正を受けて113円台前半で越週した。

翌週28日から月末にかけては、イエレン議長から利上げに対する慎重な姿勢が報じられるとドル/円は113円台半ばから112円台前半まで軟調推移し、結局112.57円で越月している。

■ 今月の見通し

今月のドル/円はトレンドの出難い揉み合う相場展開を予想する。市場では米国の金融政策を意識した相場動向が継続しており、まだら模様の米経済指標や強弱入り混じったFRB高官等の要人発言を手掛かりにドル/円は方向感を探る流れとなるであろう。

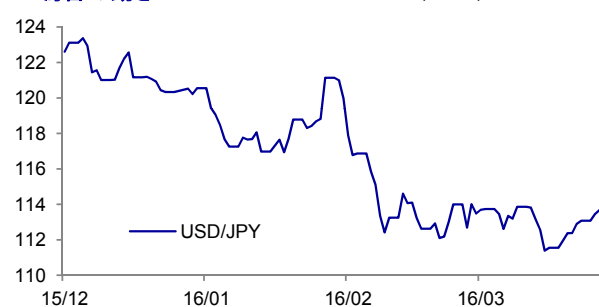
まず米金融政策については、26日(火)～27日(水)にFOMCが予定される。前回3月15日～16日実施のFOMCでは、その声明文で景気判断が1月の「昨年後半に減速した」から「経済活動は緩やかなペースで拡大している」へと上方修正され、また、雇用環境も「一段と力強さを増したことを示している」と復調ぶりが明示された。イエレン議長により「ショックに直面しても立ち直りの早さを見せている」とコメントされた米経済は、消費、雇用、物価等、指標面では総じて堅調に推移しており、年初から2月中旬にかけて一時浮揚した景気後退懸念は一服、足許のリスクセンチは回復傾向にある。とは言え、今回のFOMCでは、米国外の景気減速リスクを踏まえ追加利上げは見送られる見込み。先月29日のイエレン議長による講演でも利上げに対して「慎重な姿勢は特に正化される」と指摘しており、当面は中国をはじめとする新興国の景気減速懸念や、原油等の商品価格の下落リスクを見極めるものと思われる。力強い米経済が確認される中での追加利上げ見送りとなれば、株価や原油価格を押し上げ、ドル/円相場は素直にサポートされると思われる。

上述を勘案すれば米経済指標には注目したい。特に物価と雇用関連の指標では、1日(金)の3月雇用統計、14日(木)の3月消費者物価は重要であろう。賃金上昇率の低迷によるデフレ懸念や雇用増加ペースの鈍化等が確認されればドル/円は下値を探るであろう。またその他経済指標についても、5日(火)の4月ISM非製造業景況指数、13日(水)の3月小売売上高、19日(火)の3月住宅着工件数、20日(水)の3月中古住宅販売件数等も同様に留意したい。

一方本邦では27日～28日(木)に日銀政策決定会合が予定されている。市場参加者の意表を突いた政策運営が継続しており事前の要人コメント等から追加緩和を窺うことには困難が伴うものの、仮に追加緩和を実施した際には一時的には円売り相場となることが予想される。だが、前回同様影響は限定的かも知れない。

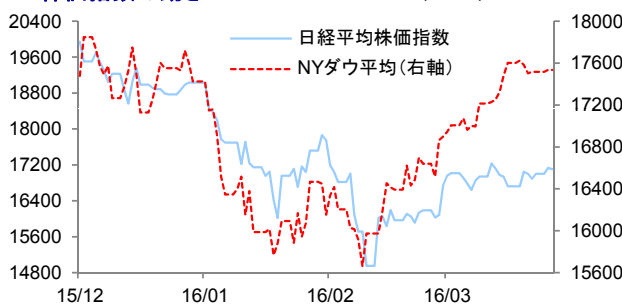
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	米ISM製造業	2月	48.5	49.5	48.2
3/3	米ISM非製造業	2月	53.1	53.4	53.5
3/4	米非農業部門雇用者数	2月	195K	242K	151K
3/4	米失業率	2月	4.9%	4.9%	4.9%
3/15	米小売売上高 (前月比)	2月	▲0.2%	▲0.1%	0.2%
3/16	米CPI (前年比)	2月	0.9%	1.0%	1.4%
3/17	米FOMC				
3/22	米マークイット・サービス業PMI	2月	51.9	51.4	51.3
3/25	米GDP (2時速報)・年率/前期比	4Q	1.0%	1.4%	1.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (6名、109.50～120.00、中心110.50～116.25)

藤崎	111.00 ～ 118.00	本邦新年度入りで外物投資増加期待による円安を予想。海外からの配当関連等の円買い需要も残るが、直接投資や対外証券投資に押され、本邦での政策期待も手強い、円安方向に戻す展開となろう。
加藤	111.50 ～ 120.00	新年度入りした本邦から外債投資が活発に動き出し、その一部はヘッジオープンにすると予想する。また伊勢・志摩サミットに向けて、政界経済に対するリスクオフの動きに歯止めをかけるためにもまずは本邦政府が景気テコ入れを表明すると考える。
矢野	110.00 ～ 115.00	今月は年度初ということもあり、日銀によるマイナス金利導入の影響から例年以上に本邦機関投資家・年金勢の対外証券投資に注目が集まる。4月の米利上げは見送られると思われるが、6月はまだ可能性が残っており、ドル/円相場のサポート材料となろう。
高田	109.50 ～ 115.00	市場では米国の金融政策を意識した相場動向が継続しており、まだら模様の米経済指標や強弱入り混じったFRB高官等の要人発言を手掛かりに方向感を探る展開か。雇用統計や小売売上高等、良好な経済指標が確認されれば底堅く推移するであろう。
佐藤	110.00 ～ 116.00	4月は新年度入りに伴う本邦機関投資家による外国証券投資に対する期待が高まりやすい。また、世界の金融市場は足許では安定しており、円買い圧力は後退し、底堅い展開を予想する。ただ、米金融正常化プロセスが予想以上に緩やかになりそうで、ドル/円の上値も限定的に。
尾身	111.50 ～ 116.50	新年度を迎え円買いフローも一巡したことでドル/円は底堅く推移すると予想。FRBによる早々の利上げは期待薄だが、米指標がまずまずな結果であるためドルインデックスも底堅く推移するだろう。新規フローによるドル買いが相場を押し上げる可能性もあるか期待したい。

■ドル・ベア (5名、107.00～115.00、中心108.00～114.00)

山下	107.00 ～ 114.00	参議院選挙やサミットを前に、日本政府からの株高・円安トレンドの回帰を目的とした日銀への追加緩和圧力は強まるものと考えられるが、現状のアクションから察するに、日銀の追加緩和は限界と見るべき。ドル/円は下値を試す場面が見られよう。
西島	108.00 ～ 114.50	FRBの早期追加利上げ観測の後退著しく、6月までは利上げ気運の高まりを探る展開が続くとみられ積極的なドル買いは期待薄。新年度入りに伴い本邦機関投資家の外債投資が盛り上がる可能性はあるも、円高警戒からヘッジ付が大勢か。ドル/円上昇の手掛かり・材料に乏しく上値の重い相場展開に終始しそう。
下山	108.00 ～ 114.00	イエレンFRB議長の発言からは少なくとも米4月利上げの可能性は低そう。期初の本邦機関投資家の円投フローには注意が必要も、あくまで季節的なものであり、日米の金融政策が意識されることで投機筋が追随することはなかろう。ドル/円は上値重く推移すると予想する。
西谷	108.00 ～ 114.00	米国の利上げ期待が大きく後退する中、投機筋を中心にポジションをドルロングに傾けづらい状況が続く。年2回の利上げを前提とすれば、6月に利上げに踏み切る可能性はあるものの、マーケットが織り込み始めるにはまだ時間がかかるものと思われ、今月は下方向の値動きを警戒して臨みたい。
森谷	109.00 ～ 115.00	3月FOMC、イエレンFRB議長の発言を踏まえると早期追加利上げは想定しづらい状況。足許では世界の株式市場や原油価格にやや落ち着きが見られるにも関わらず上値の重いドル/円の推移を見ると引き続き下方向への動きを警戒したい。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1000 ~ 1.1900
EUR/JPY 124.00 ~ 133.00

国際為替部 為替営業第二チーム 島田 貴章

■ 先月の為替相場

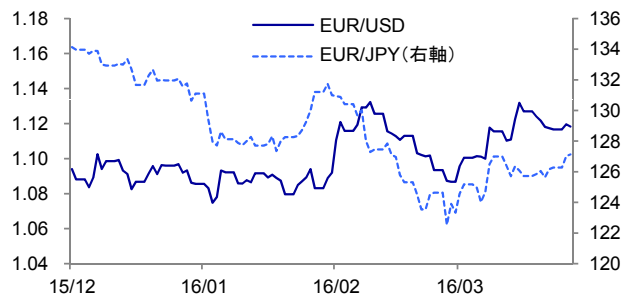
3月のユーロ相場は上昇する展開となった。月上旬は米2月雇用統計やECB理事会後のドラギECB総裁発言を材料に上昇。月初1日ユーロ相場は1.08台後半でオープン。公表された声明文の中でドラギ総裁のインフレに対する弱気な姿勢が示されると、一時1.08台前半まで下落。3日、米2月ISM非製造業景気指数の冴えない結果を受け1.09台半ばまで上昇。翌4日、米2月雇用統計発表後には荒い値動き。発表直後には非農業部門雇用者数の予想を上回る結果に1.09付近まで下落するも、その後は2014年12月以来のマイナスに落ち込んだ平均賃金が材料視され急反発、一時1.10台半ばまで上昇。翌週8日、独1月鉱工業生産は前月比+3.3%と予想同+0.5%を大幅に上回る結果となり、ユーロ相場は1.10台半ばまで再上昇。10日、ECB理事会では追加緩和を決定。内容は事前予想を上回る内容であり、ユーロ相場は月安値となる1.0822まで下落。しかしながらその後のドラギ総裁記者会見における「更なる利下げが必要になると予想しない」との発言を受け、1.12近辺まで急反発した。月中旬は米FOMC等を材料に再度上昇。週明け14日にはユーロ売戻し優勢の展開に1.11ちょうど近辺まで水準を戻し、FOMCまでは同水準での揉み合い推移。16日、FOMCでは利上げ見送りと政策金利見通しの引き下げを発表。予想を上回る政策金利見通しの下方修正によりユーロ相場は1.12台半ばまで急騰。翌17日、ユーロ圏2月消費者物価指数の市場予想を上回る結果を受けユーロ相場は1.13台前半まで上昇。翌18日には週末を控えユーロ売戻し優勢の展開となり1.12台後半まで水準を下げた。月下旬はFRB高官発言を材料に下落するも後に再上昇し高値を更新する展開。週初21日、ウィリアムズおよびロックハートFRB高官は米景気への強気な見方と4月FOMCでの利上げ可能性について言及、ユーロ相場は1.12台半ばまで下落。翌22日、ベルギー連続爆破テロの発生を受け一時1.11台後半まで急落。その後もエバンス、ハーカー、ブラード等のFRB高官によるタカ派的発言が相次ぎ、週末25日には1.11台半ばまで水準を下げて推移した。週明け28日、米2月コアPCEデフレーター予想を下回る結果を切っ掛けにユーロ相場は1.12台前半まで上昇。翌29日、イエレンFRB議長講演では前週の地区連銀総裁発言から一転して「金融政策は慎重に調整すべき」とのハト派的な発言がなされ、ユーロ相場は1.13ちょうど近辺まで上昇。以降も上昇基調は継続し月末31日には月高値となる1.1412をつけた。その後やや水準を戻し1.13台後半の水準にて取引を終えた。

■ 今月の見通し

16年4月のユーロ相場は底堅く推移することを予想する。3月ECB理事会においては①主要リファイナンスオペ金利の引き下げ(+0.05%→+0.00%)、②限界貸出金利の引き下げ(+0.30%→+0.25%)、③預金ファシリティ金利の引き下げ(▲0.30%→▲0.40%)、④拡大資産購入プログラム(APP)の月間購入額拡大(600億ユーロ→800億ユーロ)、⑤APP対象資産に非金融法人社債を追加、⑥ターゲット型長期流動性供給第二弾(TLTRO2)を2016年6月から開始との追加緩和パッケージ導入が決定された。従前からのドラギECB総裁による追加緩和と予告発言を受け期待感が大きく醸成されていた状況であったが、事前予想を上回る規模の包括緩和であったと評価出来るだろう。しかしながら、理事会後のドラギ総裁会見における今後の緩和拡大の限界を吐露したとも取れる発言によって、ユーロ相場は反転上昇を演じた。後に、バイトマン独連銀総裁も「3月時点での行動は必要だったが決定全体は行き過ぎであった」との発言を行っており、再度の緩和拡大には相当のハードルが存在しているとの印象を受ける。4月ECB理事会における金融政策変更は当然の事ながら、当面の間は再度の追加緩和と示唆も難しくなると予想される。金融政策によるユーロ安誘導に限界が窺える状況下、ユーロ相場には上昇圧力が加わることとなろう。他方、米国の金融政策については、3月下旬のFRB地区連銀総裁発言を契機として俄かにタカ派色が強まったが、イエレン議長講演により従前の正常化に対する慎重路線への再度の軌道修正がなされた。斯かる状況下、4月FOMCでの利上げ実施可能性はほぼないと考えられ、金融政策正常化に対する慎重路線継続は、ユーロ相場の底堅い推移の一因となろう。また、商品市場の動向も潜在的なユーロ上昇材料として存在すると考える。足許、原油先物相場は小康状態にて推移するものの、需給バランス等のファンダメンタルズが改善されたとの印象はない。新四半期を迎えるにあたり、投資家のポートフォリオリバランスニーズによる商品市場からの資金引き上げ加速を懸念する声も一部で聞かれ、原油先物相場は下落方向のリスクが相対的に高い様に思われる。再度安値圏へ下落する場合、リスクセンチメントの悪化として金融市場に作用し、ユーロショートカバーを誘発し易い状況となるだろう。上記の材料に鑑みると、ユーロ相場は底堅く推移することを予想する。

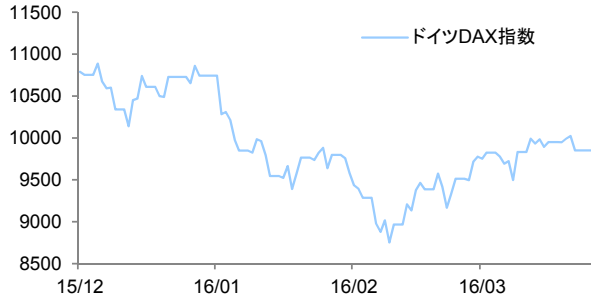
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	欧 失業率	1月	10.4%	10.3%	10.4%
3/8	独 鉱工業生産 (前月比)	1月	0.5%	3.3%	▲0.3%
3/8	欧 GDP (前年比)	10-12月	1.5%	1.6%	1.6%
3/10	欧 ECB主要政策金利	3月	0.05%	0.00%	0.05%
3/14	欧 鉱工業生産 (前月比)	1月	1.7%	2.1%	▲0.5%
3/17	欧 消費者物価指数 (前月比)	2月	0.1%	0.2%	▲1.4%
3/22	欧 消費者信頼感	3月	▲8.3	▲9.7	▲8.8
3/22	欧 コンボジットPMI	3月	53.0	53.7	53.0
3/22	独 IFO企業景況感指数	3月	106.0	106.7	105.7
3/22	独 ZEW調査 (現状)	3月	53.0	50.7	52.3

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (10名、1.0900～1.1800、中心1.1100～1.1700)

藤崎	1.1000 ～ 1.1700	ECBに金融政策による通貨押し下げは限界。壮大な投機で積み上がったユーロショートがアンフインドされる展開を予想。一方で、年内の米追加利上げ観測も根強く、英国のEU離脱懸念もある中、ユーロの上値も限定的となろう。
山下	1.1100 ～ 1.1800	前回のECB会合後のドラギ総裁の追加緩和打ち止めを匂わす発言から、早期の追加緩和が考えづらい。況や、FRBの追加利上げ観測も後退している現状では、ECB追加緩和が行われたとしても、ユーロへの影響は限定的となり、ユーロは強含む公算が強い。
矢野	1.0900 ～ 1.1500	当面は、3月のECBによる追加金融緩和策の効果を見る時間帯が続くと見られる中、4月の米追加利上げ観測が後退しており、ユーロは底堅い推移となろう。リスク要因として、ECBが更なる追加緩和の意思表示が見られた場合には上値を押さえられよう。
高田	1.1000 ～ 1.1700	ECBによる追加緩和が一服する中、米金融引締めペース鈍化に伴いユーロは底堅い展開を予想する。英国のEU離脱等によるユーロ売りも予想されるが、国民投票日までは決定打に欠けるため下値は限定的であろう。
佐藤	1.1100 ～ 1.1700	イエレン議長のハト派発言を背景に米金融正常化プロセスが予想以上に緩やかになるとの見方が台頭している。ECBによる3月の追加緩和実施後もユーロの下押し圧力が限定的であることを勘案すると、ショートポジションの買い戻しや経常黒字を背景に堅調な展開を予想する。
西島	1.1000 ～ 1.1700	英国のEU離脱問題・6月国民投票までは欧州通貨全般に対する売り圧力を警戒すべき場面はあるものの、前回会合時におけるドラギECB総裁の更なる追加緩和に否定的な姿勢から一段とユーロ売り地合いが広がるとは考えにくい。米追加利上げ観測の後退に伴うドル売りもユーロドルを押し上げる格好。
尾身	1.1100 ～ 1.1700	ユーロ相場は引き続き上昇圧力にさらされると予想。FEDの早期利上げ期待が後退する中、ドル買い巻き戻しの流れからユーロも下落しづらい相場展開を予想。先月ECBが大胆な金融緩和を導入したため追加投入は考えづらく、ドル安の流れを受けて、大きくレベルを切り上げる可能性も否めない。
下山	1.1100 ～ 1.1700	ECBによる金融緩和は打ち止め感があり、一層のユーロ安は期待薄。加えて、イエレンFRB議長は利上げに慎重な姿勢を示しており、ドル売りが強まる可能性もあろう。投機筋の既存ポジションのショートカバーも相まって、ユーロは水準を切り上げると予想する。
西谷	1.1100 ～ 1.1700	米国の利上げ期待が大きく後退する中、全体的にドル売り優勢の場面が多くなると思われる。英国のEU離脱問題やユーロ圏全体の地政学的リスクは残存するものの、あくまで一時的な値動きに留まると考えられ、上方向の展開を基本路線に臨みたい。
森谷	1.1100 ～ 1.1700	3月に追加緩和を決定したばかりである上、その後ドラギECB総裁から今後の追加緩和に対して否定的な発言が飛び出した以上、当面追加緩和期待は高まりづらいだろう。米国早期利上げ観測も後退する中では、ユーロは底堅い動きになると予想する。

■ ユーロ・ベア (1名、1.0700～1.1400、中心1.0700～1.1400)

加藤	1.0700 ～ 1.1400	リスクオフに伴うユーロのポジション調整は山場を越えたとの認識。大きく1.05～1.15のレンジを離れるような状況ではないと考える。従って市場の落ち着きとともにユーロショートポジション構築が再燃すると考える。
----	-----------------------	---

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.4000 ~ 1.4700
GBP/JPY 157.00 ~ 169.00

欧州資金部 本多 秀俊

■ 先月の為替相場

3月のポンド相場は対ドル、対円で底打ち反発。ただし、対ドルでは2月の下落分の8割方を回復したのに比し、対円で反発は同5割弱にとどまり、対ユーロではむしろ月を通して軟調推移が支配的と値動きは分かれた。主要通貨同士の強弱はユーロ>ポンド>円>ドルという序列になり、欧州中銀による追加金融緩和と打ち止め感や米連銀追加利上げ観測の後退など、この間、各国/経済の金融政策の方向感が大きく材料視された。一方で、ポンドの値動きの大半はユーロやドルの要因によるもので、英固有の要因がポンドに与えた影響はほとんど読み取れなかった。

月初、ポンドは堅調な滑り出しを見せたが、前後して発表された英経済指標は、各種2月購買部指数(1日製造業、2日建設業、3日サービス業)は揃って低迷しており、3日発表された2月住宅価格指数(ナショナルワイド、ハルファックス)も市場予想を下回っていた。敢えて挙げるなら英中銀カニワ副総裁が英住宅市場の活況に警鐘を鳴らすかの発言をしていたが(2日)、それが英中銀利上げ観測を高め、ポンド買いを促したとは考え難かった。EU残留を問う英国国民投票(6月23日)を巡っても新しい材料があったとは思わず、ポンド反発の理由としては、2月後半の急速なポンド下落の「調整」という以上に、特段、要因は考えられなかった。

その後、通貨市場の大局は金融政策動向を軸に形成されていく。まず、10日、欧州中銀理事会は主要リファイナンス金利を含む政策指標金利を全て引き下げた上、拡大資産購入策の規模を拡大、購入対象資産に社債を追加と、予想以上に踏み込んだ金融緩和策を発表した。直後から全面安に反応したユーロは、しかし、その後の記者会見でドラギ総裁が「これ以上の利下げが必要になるとは予想していない」と述べると急反発。連れてポンドも対ドルでは急落後、急反発したが、並行して対ユーロでは急上昇後、急反落することになった。週が替わって14日以降、ポンドは調整的な軟調推移が先行し、15日の日銀金融政策決定会合(一部で追加緩和も予想されたようだが、結果は市場の大半の予想通り現状維持)後はポンド/円の急落に引っ張られて下げ幅を広げたものの、16日、米連銀公開市場委員会をきっかけに再び底打ち。市場の大方の予想通り政策金利を据え置いたものの、同委員会の予想する先行き政策金利見通しが明確に引き下げられた(例えば、16年末の中央値は昨年12月時点の予想から50bp引き下げられた)ことなどを受けてドルが全面安に反応し、ポンドも対ドルでは大幅に水準を切り上げた。

■ 今月の見通し

4月のポンド相場は、堅調気味の横ばいを予想。3月半ばに前後して、原油価格、米株価指数などが昨年末の水準を上抜けた。年明け直後から金融市場を席卷した乱高下の底流には、昨年12月の米利上げ開始とそれに伴う投資資金の流動性低下に対する懸念があったものと考えられるが、そうした懸念に煽られた混乱が3月16日の米連銀利上げ見送り、利上げ見通し下方修正を受けて一巡したかっこう。ただ、そもそも昨年12月の時点で市場の総意は16年中に合計50bp程度の米利上げしか見込んでおらず、3月の下方修正は、いわば米連銀が市場の思惑に沿う方向に軌道修正しようなの。1月以降の乱高下も、現実にはそぐわないほど前のめりだった米連銀の利上げ姿勢を反映せざるをえなかった「不必要な値動き」だったと位置付けることもできよう。であるならば、1月以降の値動きとは反対方向の調整、ポンドでいえば調整高が今しばらくは支配的になると見込むのが順当ではないだろうか。それでも、ポンドがすっきりと上値を切り上げていく展開を予測できないのは、やはり、6月の英国国民投票に向けての不透明感が重く押し掛かるから。万が一EU離脱となれば、自由貿易協定を巡る不透明感が国外からの対英投資を抑制するだけでも大きな英景気減速要因になるが、とりわけ金融機関の国外流出(大陸欧州への回帰)が英経済成長の大きな阻害要因になるものと見込んでいる。英国国民がEU脱退を選ぶ可能性は依然として低いと見るが、こればかりは結果を見るまで確信はできない。とりわけ、14年9月のスコットランド独立を問う住民投票、昨年5月の総選挙に向けての英世論調査が、実際の結果の予測にほとんど役立たなかった経緯は、今後も不透明感を払拭できない不安要素となろう。

英中銀金融政策動向については、引き続き、原油価格の50ドル/バレル(ブレント)の反発を前提に、年央までに利上げ観測の再燃を予想の中心とするが、少なくとも国民投票が決着するまで相場の前面に出てくる可能性は低いものとする。したがって、英中銀金融政策委員会(14日)が特段の材料を提供する可能性も低いだろう。英経済指標では3月CPI(12日)や12~2月平均賃金(20日)などの物価関連指標が一番の注目だが、同様にポンドに与える影響は限定的と見込む。

なお、あくまでも可能性のひとつとして念頭に置いておきたいことだが、先月22日にブリュッセルで起きた自爆テロのような事件が英国内で起きた場合、その人的・経済的打撃もさることながら、国民投票に与える影響(おそらくは離脱派の増長)という文脈に落とし込む視点が重要になるものと思われる。

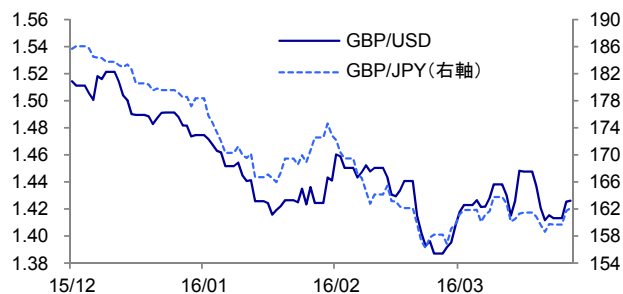
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』
好き嫌いはないので、なんでもよく食べますが、ゲデモノの類は苦手です。日本でもイナゴとか蜂の子とか食べる気はしませんでした。欧州だとエスカルゴとか蛙の脚とか、敢えて食べる気が全くしません。いつだったか、今世紀中にも予想される食糧難に昆虫食が救世主になるみたいなニュースを目にしましたが、ああいうのは、どうなんだろう？ 慣れてしまえば食べられるものなのか？ というわけで、イギリスのびっくり料理と言っても、ピンと思いつくものはなかったのですが、個人的にイギリスにきたばかりの頃面喰らったのは、ケーキの「アイシング」というやつでした。これは、言ってみれば砂糖のかたまりです。ケーキの表面を雪で覆うように真っ白に固めるのでアイシングと呼ぶものだと漠然と思ってましたが、あらためて考えると、着色したものや、装飾的に成型したものもアイシングと呼ぶので、語源の正確なところはわかりません。とにかく、甘い。甘さの爆弾のようで、日本から移り住んだ当初はとて口にできませんでしたが、慣れとは恐ろしいもので、今では、あの強烈な甘さがないと物足りなく感じるようになってしまいました。あんまり面白そうなネタを思いつかなかったもので、周りの人達に相談したところ、「マーマイトは？」という声を聞きました。確かに、これもびっくり食品と言えるでしょうが、個人的には好物なので、裏に入って思いつきませんでした。イースト菌の抽出成分をペースト状にしたもので、パンに塗って食べるのが一般的ですが、しょっぱいような、苦いような、あの独特の味を言葉で表現するのは難しいです。傑作なのは宣伝文句で「愛するか、憎むか、どちらかしかない(You either love it or hate it)」というもので、確かに、あの癖のある味を受け付けられない人の気持ちもわからないではないです。ご参考までに、テレビCMで印象に残っているのはこれです。

<https://www.youtube.com/watch?v=cHbpTrFPcTY>

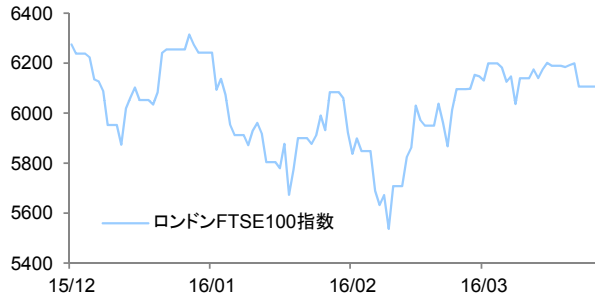
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/9	鉱工業生産 (前年比)	1月	0.0%	0.2%	-0.2%
3/9	製造業生産 (前年比)	1月	-0.1%	-0.7%	-1.7%
3/11	貿易収支 (百万ポンド)	1月	-3000	-3459	-3699
3/16	ILO失業率	11-1月	5.1%	5.1%	5.1%
3/16	週平均賃金上昇率 (前年比)	11-1月	2.0%	2.1%	1.9%
3/17	英中銀基準金利		0.50%	0.50%	0.50%
3/22	消費者物価指数 (前年比)	2月	0.4%	0.3%	0.3%
3/24	小売売上高 (含自動車/前年比)	2月	3.9%	3.8%	5.4%
3/31	GDP (前年比)	4Q F	1.9%	2.1%	2.1%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7400 ~ 0.7850
AUD/JPY 82.00 ~ 88.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

3月の豪ドルは、0.71半ばから0.77前半まで大幅上昇。

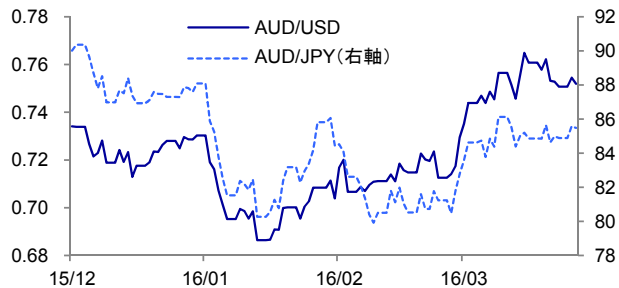
1日、豪ドルは0.71半ばでスタート。豪州準備銀行(RBA)理事会では、政策金利が2.00%に据え置かれ、豪ドルは0.71後半に小幅上昇。翌日、豪10〜12月期GDPが市場予想+2.5%を大幅に上回る前年比+3.0%となると、豪ドルは0.72前半に急伸。その後、原油や鉄鉱石等の上昇を背景に、200日移動平均線0.7260近辺を上抜けると、豪ドルは0.73台に浮上。4日、米経済指標の下振れから米ドル売りが進行、豪ドルは0.73後半に続伸。翌日、米2月雇用統計において、非農業部門雇用者数は予想:前月比+19.5万人増に対して、結果:同+24.2万人増と予想比上振れするも、時間当たり平均賃金が前月比▲0.1%減少したため、米国の早期利上げ観測期待が高まらず、豪ドルは0.74半ばに続伸。翌週7日、鉄鉱石+18%及び原油+5%と商品価格が大幅に上昇したことから、豪ドルは0.74後半まで値を伸ばした。9日、原油の+4%高を受けて、豪ドルはとうとう節目の0.75を突破。11日、株高・原油高を背景としたリスク選好の動きの強まりを受けて、豪ドルは0.75後半に上昇。

翌週14日には0.76目前まで上昇するも、商品価格の下落を背景に、豪ドルは0.75前半に反落。翌日も、商品価格の続落を受けて、0.74半ばに下落。しかし、16日のハト派(金融引き締め消極派)なFOMC結果より、米ドル売りが進行。豪ドルは再び0.75を突破。18日、豪2月雇用統計は強弱ミックスの内容となったものの、失業率の低下を好感して、豪ドルは0.76台に上伸。翌日、商品価格上昇を背景に、豪ドルは高値0.76後半まで上昇するも、その後は調整売りが入り、0.75台に反落。

22日、スティーブンスRBA総裁は「国内経済は改善しており、金融システムも健全」との見方を示し、豪ドルは再び0.76台に浮上。しかし、米連銀高官より相次いでタカ派(金融引き締め積極派)な発言があり、ドル買いが優勢となり、豪ドルは一時0.75割れの水準まで下落。その後、値ごろ感から0.75前半に戻した。29日、イエレンFRB議長より「追加利上げについて、海外経済のリスクなどを考慮して慎重に進める」との発言があり、米ドル売りが進行。豪ドルは0.76前半に反発。31日には更に値を伸ばし、高値0.7723を付けた。

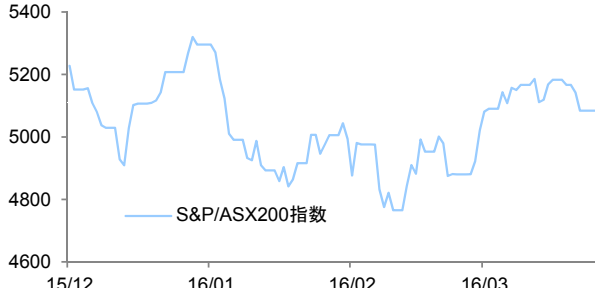
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	住宅建設許可件数[前月比]	1月	▲3.0%	▲7.5%	8.6%
3/1	RBAキャッシュレート		2.00%	2.00%	2.00%
3/2	GDP[前期比]	10-12月	0.4%	0.6%	1.1%
3/2	GDP[前年比]	10-12月	2.5%	3.0%	2.7%
3/3	貿易収支	1月	▲3200M	▲2937M	▲3524M
3/3	小売売上高[前月比]	1月	0.4%	0.3%	0.0%
3/9	住宅ローン[前月比]	1月	▲3.0%	▲3.9%	2.7%
3/15	RBA議事録				
3/17	雇用者数変化	2月	13.5千人	0.3千人	▲7.4千人
3/17	失業率	2月	6.0%	5.8%	6.0%

■ 今月の見通し

4月の豪ドルは揉み合いを予想、27日の豪10〜12月期消費者物価指数(CPI)に注目。

3月、豪ドルは8%急伸し、0.77台を付けた。要因は以下3つを考えている。

まず、豪州は低インフレながらも昨年5月以降金融政策を維持(政策金利2.00%を維持している)。一方で、米国は前回FOMCのFOMCメンバーの政策金利見通し(ドットチャート)において、2016年の利上げ回数を年4回から2回に下方修正した(1回あたりの利上げ幅を25bpにて計算)。この大幅な下方修正を受けて、米ドル売りが進んだ。更に、3月は、ECBの追加金融緩和や、NZ準備銀行(RBNZ)の利下げも行われ、豪州と他国の金融政策の方向性の違いより、豪ドルに資金が流入した。

次に、商品価格が3月に入り、大幅上昇した。産油国の増産凍結期待の高まりや、国際エネルギー機関(IEA)が「原油価格が底打ちした可能性がある」と月報で述べたことから、NY原油先物(WTI)は+11%上昇。豪州最大の輸出品目である鉄鉱石(鉄分62%)も+6%上昇した。コモディティ通貨とされる豪ドルも商品価格に連れ高となった。

最後に、豪ドルは2014年9月以来下回っていた200日移動平均線0.72半ばをブレイクし、テクニカル的にも豪ドルはブル相場に突入した。3月2日に200日移動平均線を上抜けてからの豪ドル上昇スピードは速く、加えて、豪ドルはここ1か月間このレベルを上回って推移している。

上記材料の継続性について考える。RBAは「低インフレが続けば、需要を支援する上で適切であるならば、追加緩和に踏み切る可能性がある」と言及しており、4月下旬のCPI結果を見るまでは、RBAは金融政策を維持するだろう。更に、テクニカル面でも豪ドルは200日移動平均線0.72半ばがサポートになろう。一方、商品価格については、産油国の増産凍結期待の高まり等、事実に基づく話でなく、上昇一服の可能性があり、豪ドルサポート材料とはならないとみる。以上の強弱ミックスの材料から、豪ドルは高値圏での揉み合いを予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

主なびっくり料理は①ベジマイト(イースト酵母の入った黒いペースト、バターと一緒にパンにつけて食べることが多い)、②カンガルー、エミュー、ワニ等の肉、③ウィッチェディ・グラブ(オオボクトウの幼虫、アボリジニ料理)。しかし、当地のびっくり料理よりも、オススメ料理の方が魅力的なので、今回はオススメ料理に話を変えます。私のチームは出張者が来ると、SurfAndTurf(海と芝→シーフードとステーキ)が食べられるレストランに行き、シーフード、ステーキ、デザート、ワインのフルコースを堪能します。食欲旺盛なオージーメンバーに付いていくと、大抵の出張者は途中でギブアップをします。私も当地に着任して、確実に胃袋と肝臓が鍛えられ、東京から「食いしん坊」と言うあだ名が付いているそうです。。。それでは、早速本家くいしん坊! 万才に負けず、当地の美味しい料理を熱血レポートします。

まず、シーフード。オーストラリアでは1年中生オイスターを食することができます。生以外にも、キルパトリック(殻付きの牡蠣に、トマトケチャップとウスターソースをかけて、刻んだベーコンを乗せてオープンしたもの)、ロブスター、モートンベイバグ(オーストラリア・クイーンズランド州のモートン湾に由来、ウチワエビモドキ)もオススメ。ジョン・ドリー(マトウダイ)のフィッシュアンドチップスも美味。次に、ステーキ。やはりベタなのはオージービーフになります。グルメなオーストラリア人に人気上昇中なのが「WAGYU」。また、オーストラリアにおける肉消費量は鶏肉、牛肉、豚肉、ラム肉という順位だそうです。最後に、デザート、パンプキン(粉砂糖で味付けしたメレンゲをクリームや果物で飾りつけたもの)も。

日本に負けないおもてなしで迎える出張者との食事は、毎回、Niceな食事、Niceなワイン、NiceではないBillとなります。3K男子ならぬ3N食事でもハードルが高そうです。「お・も・て・な・し・で、お・か・ね・な・し」

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2600 ~ 1.3500
CAD/JPY 81.20 ~ 91.20

米州資金部 高橋 勝彦

■ 先月の為替相場

月初、OPECやロシアなど産油国の動きもあり、原油に買い戻しの動きが出る中、予想を大幅に上回ったカナダの12月GDPを好感したカナダドル買いが加速し、ドル/カナダドルは1.35台半ばから1.3470まで急落、年初来で最安値を更新した。カナダ10～12月期GDPは前期比年率+0.8%と7-9月期+2.4%から伸びが鈍化したものの、市場予想の横ばいを上回る結果。その後、米2月雇用統計で非農業部門雇用者数が予想を大きく上回ったことを受けドル買いが強まり、ドル/カナダドルは1.3470付近に上昇したものの、上値では売り圧力は強く直ぐに押し戻され1.33台前半まで下落した。9日、カナダ中銀は政策金利を大方の予想通り現行の0.5%に据え置き、また、声明では「インフレリスクは概ね均衡」「インフレリスクに対する政策は適切」としたほか、「成長見通しは1月と概ね変わらず」としており、米経済見通しについても「概ねこれまでの想定通り」としており、思った以上に楽観的な見解が示されてことで、カナダドルの買い戻しが加速し、ドル/カナダドルは1.34台前半から1.33台前半へ急落した。中盤にかけて、カナダ2月失業率は7.3%と予想外に1月の7.2%から上昇し2013年3月以来の悪化となり、雇用者数も▲0.23万人と予想外に2か月連続の減少となったことから、カナダドル売りが優勢となった。ただ、原油の買い戻しが続く中、国際エネルギー機関(IEA)が原油価格の底打ちの可能性を指摘したことが、カナダドルを支援し、ドル/カナダドルは一時1.3168まで下落した。月中、原油が売り戻りに押され、カナダドルも追随し、ドル/カナダドルは1.34台まで上昇する場面も見られたが、注目の米FOMCで、年内利上げペースが緩やかになるとの観測からドル安が進行し、割安感による原油の買いも優勢となる中、ドル/カナダドルは1.3を割り込む動きとなった。その後、良好な1月小売売上高を好感したカナダドル買から、ドル/カナダドルは一時1.2924まで下落した。しかし、同時に発表された消費者物価指数は伸びを欠いたことから、カナダドル買いの反応は限定的なものになった。月後半、FRB高官から利上げに前向きな発言を受けドル高が進行し、ドル/カナダドルは1.3296まで上昇した場面が見られたものの、その後のイエレンFRB議長のアト派的発言でドル安が進み、ドル/カナダドルは再び元の水準へ戻された。4月の米利上げが遠のいたとの観測から、リスク選好的な動きが優勢となり、資源国通貨は素直に上昇する中、良好なカナダ1月GDPを受けてカナダドル買いに拍車がかかり、ドル/カナダドルは一時1.2858まで下落した。その後、調整が入り1.3005で越月となった。

■ 今月の見通し

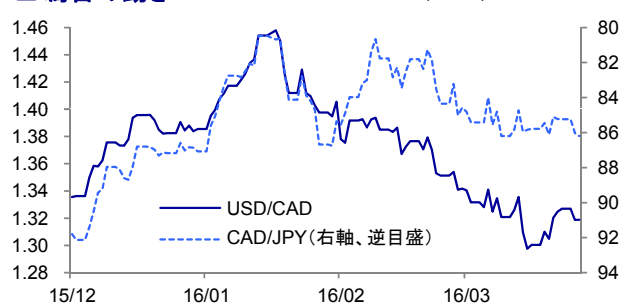
カナダドルは引き続き原油価格をはじめとした商品価格の動向が鍵を握る展開となる。足許では原油価格の反動により、昨年まで売り込まれていた資源国通貨を安値で拾う活発な動きが見られる。原油価格底打ちの動きは、主要産油国による生産調整に関する交渉や、北米の産油活動の鈍化などの供給サイドに対する見方の改善が要因と考えられる。一方、需要サイドは、以前として世界経済に対する悲観的な見方が燻っていて、更なる商品価格の改善には時間がかかると思われる。金利面からは、米金融政策は緩やかなペースで進められることが見込まれる一方で、カナダでは追加金融緩和の必要性が後退しており、金利差の縮小が見込まれる。資源国通貨において為替水準調整が進んでおり、リスク選好的な場面においてはカナダドルは最も買戻されやすい通貨であるとみている。

『当地のびっくり料理』

高校二年から卒業するまでカナダ、ノバスコシア州にある小さな街、ヤーマスというところに住んでいました。ヤーマス周辺にはロッピーパイ(Rappie Pie)という地元料理があります。パイといってもデザートではなくおかずです。じゃがいも料理なのですが、言ってしまうとスライムのような見た目をしています。食感とはにかくムニムニしています。味もとにかくシンプルで基本的には鳥のダシと塩の味しかありません。一人分を作るのに14個のじゃがいもを擦って、水気を完全にとる作業をしなければならず、さほどおいしいわけでもないのに、無駄に手がかかります。17世紀頃、カナダに最初に住みついたフランス移民によって考えられた料理だそうです。当時は魚以外食料はなく、厳しい気候の中でも育てられるのはじゃがいもだけだったのが主な理由だとのこと。あまりいいところのないロッピーパイですが、以外にも歴史は深いのです。ただ、どうせノバスコシアに行くならロブスターなど新鮮でおいしいシーフードを食べるのをお勧めします。これだけボロクソになじっていますが、思い出も多く、トロントに住んでいる今でもたまに食べたくなる料理です。(カナダ支店 森 泰然)

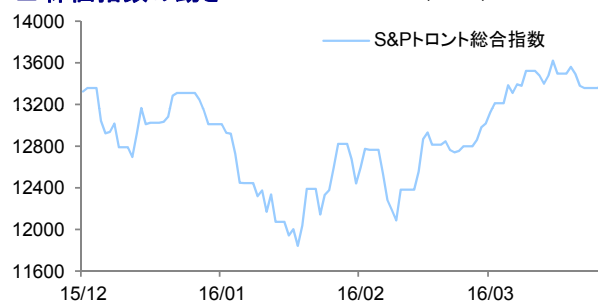
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	GDP(前月比)	12月	0.1%	0.2%	0.3%
3/1	GDP(前年比)	12月	0.0%	0.5%	0.5%
3/1	GDP(四半期/年換算)	4Q	0.0%	0.8%	2.4%
3/9	カナダ銀行翌日物貸出金利	3/9	0.5%	0.5%	0.5%
3/11	失業率	2月	7.2%	7.3%	7.2%
3/11	雇用ネット変化率	2月	10.0K	-2.3K	-5.7K
3/18	小売売上高(前月比)	1月	0.6%	2.1%	-2.1%
3/18	小売売上高(除自動車/前月比)	1月	0.4%	1.2%	-1.7%
3/31	GDP(前月比)	1月	0.3%	0.6%	0.2%
3/31	GDP(前年比)	1月	1.1%	1.5%	0.6%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1130 ~ 1180
 KRW/JPY 9.62 ~ 10.10
 JPY/KRW 9.90 ~ 10.40

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 吉田史門

■ 先月の為替相場

3月のドル/ウォン相場は、昨年末から続いているリスクオフの流れが巻き戻る動きに大きく影響される展開となった。中国株や原油価格が堅調に推移する中、ドル/ウォン相場は月間ベースで5か月ぶりに下落した。

月初のドル/ウォン相場はリスクセンチメントの改善を受けて下落した。月初2日のドル/ウォン相場は、前月末対比+5.7ウォン高の1231.0ウォンで取引を開始。北朝鮮との地政学的リスクが高まる中、早々に月間高値となる1235.9ウォンをつけた。しかし、堅調な米2月ISM製造業指数や人民元高を受けて、翌3日以降のドル/ウォン相場は下落基調に転じた。米2月雇用統計後もこの流れが継続し、7日のドル/ウォン相場は約1か月ぶりに1200ウォンを下回った。ただし、8日に発表された低調な中国2月貿易収支をきっかけにリスクセンチメントが再び悪化し、ドル/ウォン相場は一旦下げ幅を縮小した。

月央のドル/ウォン相場は各国中銀のスタンスを見極めながら下落した。10日に開催された韓国銀行の金融通貨委員会では、大方の予想通り、金融政策の現状維持が決定された。イ・ジョヨル総裁が会見で現行の金利水準は十分に緩和的であると認識を示したことで、同総裁のタカ派的なスタンスが確認され、ドル/ウォン相場は再び下落基調に転じた。その後、注目されていたECB理事会で追加金融緩和が決定されたことにより、リスクセンチメントが改善したことや、中国での人民元高などもドル/ウォン相場の重しとなった。15日の日銀金融政策決定会合でもサプライズはなかった。16日に開催されたFOMCでは、2016年の利上げ見通しが年4回から年2回に下方修正されるなど、市場の予想以上にハト派的な結果となったことで、ドル/ウォン相場は下落に拍車がかかった。

月末のドル/ウォン相場は上値の重い展開となった。韓国株が一時3か月ぶりの高値を更新する中、ドル/ウォン相場は22日に月間安値となる1153.6ウォンをつけた。その後、各米地区連銀総裁によるタカ派的な発言を受けてドル/ウォンは次第に下げ幅を縮小したが、期末にかけて国内輸出企業によるウォン買い圧力が次第に強まり、上値重く推移した。結局、ドル/ウォン相場は、前月末対比で約93ウォン高の1143ウォン近辺でクローズした。

■ 今月の見通し

4月のドル/ウォン相場は、方向感の出にくい相場展開を予想する。

3月のドル/ウォン相場は、昨年末から続いているリスクオフの流れが巻き戻る動きに大きく影響される展開となった。1か月で約93ウォン高が進んだことから、多少調整してドルの買戻しが先行しても不思議ではないが、ドル買い一巡後は方向感の出にくい相場展開を予想している。

しかしながら、国内で注意したい不確定要因はいくつかある。まずは、7人いる韓国銀行の委員のうち、4月20日で任期満了となる4人が退任する。特に注目されているのは、これまでの金融通貨委員会で唯一利下げを主張してきたハト派委員の退任。3月28日に各機関(企画財政部、BOK、FSC、大韓商工会議所)の推薦した後任候補が発表されたが、そのうち、1人以外は政府寄りのハト派的なスタンスと認知されており、追加利下げ期待が高まる可能性がある。

また、北朝鮮との地政学的リスクにも注意しなければならない。北朝鮮は2月に4回目の核実験と長距離ミサイルの発射を強行した。これを受けて国連安全保障理事会の公開会合(3月2日)で北朝鮮に対する制裁決議案が採決された。その後、北朝鮮は複数回に分けて短距離ミサイルを発射したとのヘッドライン等が散見されており、緊張感は高まっている。基本的に過激なシナリオは想定していないものの、事態の沈静化に時間がかかっていることから、本件の動向は無視できないだろう。

さらに、4月13日に第20代国会議員総選挙が開催される。足許は、セヌリ党の公認選定に介入したとして、パク・クネ大統領への風当たりは強い(支持率は36%と過去最低)。韓国では大統領の再選が禁じられており、任期終了となる2018年2月までの間、政府の求心力が失われることが懸念されており、焦点は現与党であるセヌリ党が過半数を取得するか否かだろう。また、セヌリ党は韓国版量的金融緩和の要請等を含む大胆な選挙公約を持ち出しており、今後も動向に注視していく必要がある。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

韓国のびっくり料理として、ポシンタン、ボンデギ、ホンオフエをご紹介します。

・ポシンタン(補身湯)

犬の肉のスープ。古くはケジャンクッ(「ケ」は犬の意)と呼ばれていましたそうです。肉は弾力の強い鶏肉のような食感で、皮のついた部位はぶるぶるだそうです。賛否両論がある一方で日本で言うウナギの位置づけにも近いそうで、暦上で最も暑いとされる伏日(ボンナル)の定番食。特に男性が食すものとのことです。

・ボンデギ

蚕のサナギの蒸し煮。街中を歩くと、露店で作っていたり、コンビニでも缶詰が売っているくらい、比較的一般的な食べ物です。体長は2センチほどで、こげ茶色。おなかのところはジャバラ模様になっています。独特の臭いがあります。現地スタッフに言わせると、食感は柔らかめのグミで、味は煮る下味によりますが、しょうゆっぽい味とのこと。

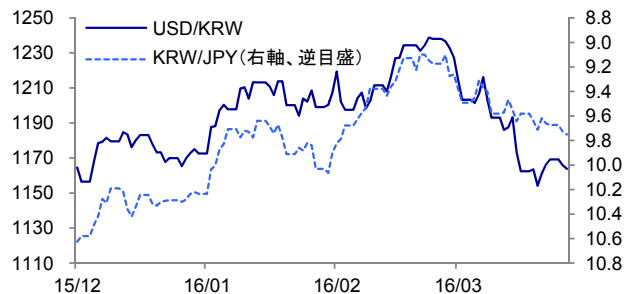
・ホンオフエ(洪魚膾)

エイを発酵させたもの。韓国南部の郷土料理で、アンモニア臭が強く、シュールストレミングに次ぎ、世界で2番目に臭いとされる食べ物です。現地スタッフも食べたことがない人が多いようです。

ちなみに、私が女性のスタッフにこの話を振ったところ、露骨に嫌そうな顔をされ、そもそも全て食べたことがない、と冷たく言い放たれました。さらに、別のスタッフとは一部食べに行くことになりそうで、一人で調べて書けばよかったと若干後悔しております。(山口)

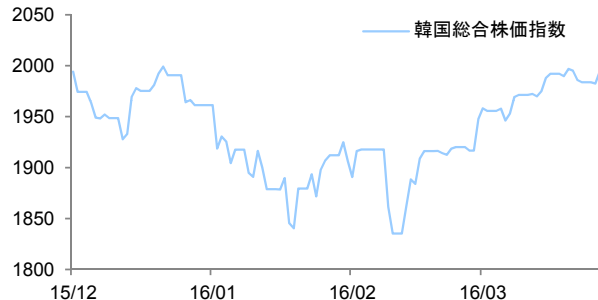
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	輸出(前年比)	Feb	-16.6%	-12.2%	-18.5%
3/1	輸入(前年比)	Feb	-16.0%	-14.6%	-20.1%
3/1	貿易収支	Feb	6,000M	7,394M	5,300M
3/2	鉱工業生産(前年比)	Jan	-0.6%	-1.9%	-1.9%
3/3	消費者物価指数(前年比)	Feb	0.9%	1.3%	0.8%
3/3	CPIコア(前年比)	Feb	1.8%	1.8%	1.7%
3/10	韓国銀行7日間レボレート	Mar	1.5%	1.5%	1.5%
3/25	GDP(前年比)	4Q F	3.0%	3.1%	3.0%
3/31	鉱工業生産(前年比)	Feb	-1.5%	2.4%	-1.9%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.50 ~ 33.25
TWD/JPY 3.30 ~ 3.60

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

3月のドル/台湾ドル相場は、米ドル安、台湾株式市場への海外資金流入を背景に台湾ドル高が進行した。

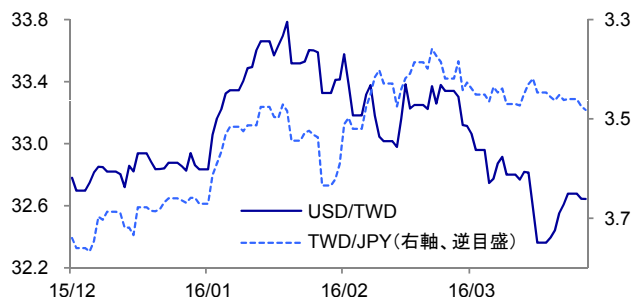
3月のドル/台湾ドル相場は、33.20台でオープン。旧正月明け以降、台湾株式市場への株式資金流入が続く中、1日には33.10近辺、3日に、33.00割れ、4日には、32.80台へと台湾ドル高が進行。7日は、前週末発表の米雇用統計を受けた米ドル安により、台湾ドル高の流れは変わらず、32.70台へ。但し、8,9日は、韓国ウォンが韓国中銀の金融政策決定会合を控えて、軟調に推移したことで、9日は一旦、32.90台まで反落。但し、11日、前日のECB総裁会見を受けたユーロの急上昇により、相対的に米ドルが大きく下落したことで、32.80付近まで台湾ドル高となった。

14日は、一旦、32.60台まで台湾ドル高が進んだものの、FOMCを控える中、15,16日には、32.80近辺まで戻し、一進一退。17日は、前日のFOMC後に発表された金利見通しにおいて年内利上げ見通しが引き下げられたことなどから、ハト派と受け止められ、米ドルが下落。台湾ドルは、32.60付近まで上昇し、18日には、前日の海外市場で、一段と米ドル安が進んだことを受け、取引終盤には、32.30台半ばまで台湾ドル高となった。

21日は、32.40付近で膠着。22日は、前日、FRB高官から4月利上げもありうとの発言があり、一旦、32.50付近まで弱含んだが、32.40付近へ回帰。23日は、ベルギーテロなどもあり、鈍い動きで始まったが、午後になると、韓国ウォンなどアジア通貨が下落に転じたことで、32.50付近へ下落。24日は、一段の米ドル反発から、32.60台へと小幅安となった。夕方に発表された台湾中銀の会合結果は、市場予想通りの政策金利引き下げとなったから、翌日、25日は、台湾中銀利下げへの反応は見られず、32.60付近での取引が続いた。28日は、台湾市場オープン前からの円安、韓国ウォン安などが意識され、一旦、32.70台を回復するも、材料も無い中、勢いは鈍り、結局は32.60台半ばまでの小幅安。29日は、前日の弱い物価統計を受けた米ドル安により、32.60付近まで台湾ドル高。30日は、前日のFRB議長講演を受けた一段の米ドル安により、32.40付近でオープンした後、取引終盤には32.20後半へ。31日も台湾ドル高が続き、32.20近辺で始まった後、一時、32.10台半ばまで台湾ドル高が進行した。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

4月のドル/台湾ドル相場は、小幅台湾ドル高を見込む。

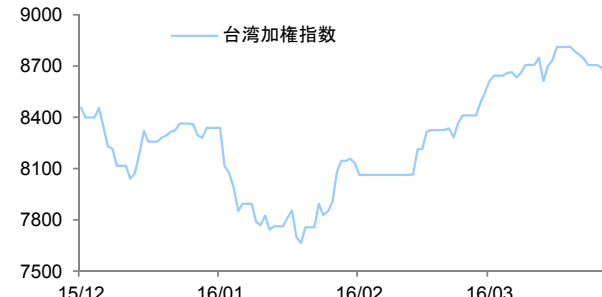
台湾経済統計は、輸出、輸出受注、鉱工業生産などが依然マイナスの伸びを記録してはいるものの、マイナス幅は縮小。1～3月が最悪期との見方も出てきており、今後、底打ち感が広がるかに注目が集まる。2月消費者物価指数(CPI)は、6か月連続プラス。1月の記録的な低温による生鮮品価格上昇もあり、大幅な上昇となった。

4月の台湾ドル相場は、米ドル動向が最大の材料。後述の通り、台湾金融政策が伝統的手段に留まる限りは、台湾ドル主導の動きは想定出来ず、米統計を受けた次回利上げ時期への思惑を背景とした米ドルの動きに左右される展開となるだろう。また、その他の材料としては、台湾株式市場への海外資金流入も挙げられる。旧正月以降、外国人投資家の大幅な買い越しが続いており、年始からの市場混乱時の売り越し金額を埋め合わせ、さらに買い越しが続いている。過去10年のデータを振り返ると、4月が最も買い越し額が大きい月であり、売り越しになったのは2回だけ。また、4月に台湾ドル安が進んだのも2回だけと台湾ドル高も進みやすい月となっている。4月の台湾ドル高は7年連続で続いており、意識しておきたい。

さて、3月の台湾中銀定例会合では市場予想通りの政策金利引き下げが行われたが、先行きについては、政策金利は1.50%、中銀の民間銀行からの平均調達金利は0.5%台、民間貸出も日欧と比べても伸びていることなどを根拠にして、依然、伝統的政策余地があるとのみ示されただけで、個人的に期待した量的緩和策などの非伝統的政策の方向感示されなかった。(結果として、2年以降の金利が上昇。)ECBにおいては、市場期待が高まって、緩和策を決定したところで、ユーロ高が進むなど、先行きの緩和を仄めかすことが必ずしも成功している訳ではない。ただ、期待が先行している期間は、ユーロ安の恩恵は受けており、マイナスのことばかりではない。この点を踏まえると、①台湾ドル相場の安定を重視して、あえて先行きの方針を示さない。②伝統的金融政策に余地がある間に台湾経済が好転するという確かな見込みがある。などの背景が想像される。ただ、この場合は、昨年8月のように、台湾金融政策が主導して台湾ドル安が進むという展開は考えづらく、米ドル連動相場の色合いが強まっていくだろう。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

台湾には政府から認定されているだけでも10以上の原住民族があり、探せばびっくりな料理を食べる風習があると思います。ただ、会社の同僚に民族の話聞くのも、センシティブな話なのかもしれないので、聞き込みは止めておきました。そのため、個人的に経験した範囲のびっくり料理をご紹介しますと、臭豆腐という発酵させた豆腐です。名前の通り、臭いが強烈です。日本で発生した異臭騒ぎの原因が臭豆腐だったというニュースもありましたが、気持ちにはよく分かります。街を歩いていても、臭豆腐を扱う店や屋台があると、遠くからでも、すぐに分かります。台湾の人からすると、日本の納豆も臭いし同じだろうと言われたりもしますが、”日本人でも納豆が嫌いな人がいる。”などと、臭豆腐に関する話題に対しては、本気になって反論してしまうほど、感情にも影響のある臭いと言えます。この臭豆腐は、大通り、繁華街の裏通り、夜市など、あらゆる場所に潜んでいます。台湾旅行に来られる際は、くれぐれもご注意ください。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/7	輸出 (前年比)	2月	-11.70%	-11.80%	-13.00%
3/7	輸入 (前年比)	2月	-8.30%	-13.10%	-11.70%
3/8	CPI (前年比)	2月	0.80%	2.40%	0.81%
3/21	輸出受注 (前年比)	2月	-10.00%	-7.40%	-12.40%
3/22	失業率	2月	3.93%	3.94%	3.91%
3/23	鉱工業生産 (前年比)	2月	-5.30%	-3.65%	-5.65%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7850
HKD/JPY 14.10 ~ 14.80

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【3月の香港ドル直物相場】

3月の香港ドルは堅調な展開が継続し、1月以来の高値となる7.7525をつけた。これまでの資金流出懸念や人民元安の影響の下げ分を取り戻した。1年物の米ドル/香港ドル先物は16年ぶりの高水準となる814ポイントからゼロ付近まで下落した。人民元の安定を受け、市場センチメントは改善された。中国政府が財政赤字を拡大することで経済成長率の目標を6.5%以上に設定する。これにより、中国のハードランディングをめぐる懸念は弱まっている。FOMCが慎重な金融政策スタンスを示したことを背景に、資金流入や本土における季節的な資金調達需要の影響で、香港ドルが7.75台まで下落した。

【3月の香港ドル金利】

3か月物のHIBORは0.55%に低下したが、3か月物の米ドルLIBORは0.62%レベル近辺で推移した。これにより、3か月物のHIBOR-LIBORスプレッドがマイナスまで下落した。一方、民間銀行のHKMAの当座預金残高は3634億香港ドルとなり、市場の潤沢な流動性を示した。香港ドル金利スワップが小幅に上昇し、HIBOR-LIBORベーススワップ(HI-LI)が新興国市場センチメントの改善により低下した。

【3月の香港株式市場】

ハンセン指数(HIS)は欧州中央銀行が打ち出した積極的な追加緩和策、ハト派寄りの米連邦準備理事会や中国全国人民代表大会の討論内容を好感して高値を回復した。尚、上海総合指数は2か月ぶりに3,000の万台を回復、中国株の回復はハンセン指数の下支えとなった。

■ 今月の見通し

【4月の香港ドル直物相場】

香港ドルが7.7525を割り込む可能性は低いと予想し、短期的にはベッグ制の香港ドル高サイドの限度である7.75香港ドルに触れる余地はないと考えられる。3月には米ドルの売られすぎ感はあるが、米当局の利上げ見通しが市場で再評価されており、米ドル/香港ドルは7.76から7.78のレンジまでリバウンドする可能性が高いと思われる。一方、もし3月の中国経済指標が低調な内容だったら、中国経済減速懸念や中国当局による景気刺激策の効果への疑問が再浮上する可能性が高く、香港ドル相場は再び下押し圧力に晒される展開になりやすいと言える。

【4月の香港ドル金利市場】

香港ドル市場の流動性は潤沢であることから、3か月物香港ドルHIBORは0.5%近辺で推移するものと想定。原油価格の反発を受け、米インフレ見通しが改善しつつある兆しを背景に、米ドル金利スワップにとって上方圧力となっており、香港ドル金利スワップを更に上昇すると見込まれる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

【香港のびっくりゲテモノ料理 カプトガニ】

つ、ついにカプトガニを食べる機会が来ました。ひょんなことからじまったこの企画は足かけ2年を経てある方の送別会という形でようやく実現したのであります。店につくなり、水槽で泳ぐカプトガニに一同テンションが上昇。お店の人にもよくわかっていて、記念撮影等、カプトガニを持たせてくれたり、お祭りムードに仕立てあげて頂きました。

写真でお見せすることができないのが残念ではありますが、大きさは胴体の長いところで50センチ程度、さらに驚くはその重さで「軽そう」に見えてとても重い(6-7キロはあるか!)のが印象的でした。

さてさて、提供されたメニューはカプトガニ一匹丸々をスープとフライで食べるというもの。硬い甲羅で覆われていて、どこを食べるのが不思議でしたが、出てきた量はそれなりにあり、少し驚きました。

肝心の味については、、、一言でいうと「食べれなくは無味」という感じです(すみません。笑)

参加したメンバーは、ここがまずい、ここはまあまあうまい、カニミソのようだ等など、盛り上がりました。。。

が、しかし、このカプトガニ料理、時間がたって冷めてくると、本来の独特の生臭さがでてきます。

終盤が一番臭いパーツを探すという不思議な光景になっていましたが、ほとんどカプトガニを食べつくしていました。

最後にカプトガニ(あるある)を二つほど。

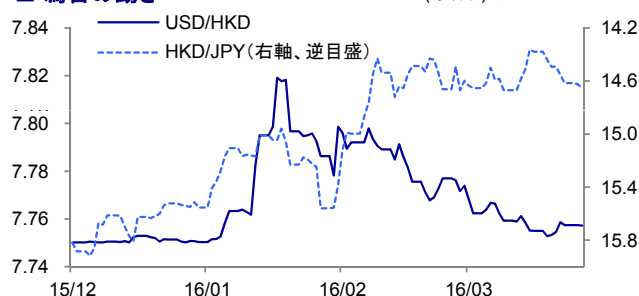
①カプトガニには毒があります。これをキレイに除去するのに1時間かかります。(注文してから相当待つことになります)

②やはり香港の方からも敬遠されがちなカプトガニですが、「決して安くはありません」

以上 香港より。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/3	小売売上高(価額、前年比)	1月	--	-6.50%	-8.50%
3/3	小売売上高(数量、前年比)	1月	--	-5.20%	-6.10%
3/3	日経香港PMI	2月	--	46.4	46.1
3/7	外貨準備高	2月	--	\$359.9b	\$357.0b
3/17	失業率(季調済)	2月	--	3.30%	3.30%
3/21	CPIコンボジット(前年比)	2月	--	3.10%	2.70%
3/29	輸出(前年比)	2月	--	-10.40%	-3.80%
3/29	輸入(前年比)	2月	--	-10.10%	-9.00%
3/29	貿易収支	2月	--	-33.1b	-17.5b
3/31	財政収支(香港ドル)	2月	--	--	46.6b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.4100 ~ 6.6100
CNY/JPY 15.97 ~ 17.97
100JPY/CNY 5.5800 ~ 6.0300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 大内 聡

先月の為替相場

【ドル人民元は上値重く推移し、月末にかけては6.50を下回る水準まで下落。】

3月5日からの全人代(全国人民代表大会≒日本の国会に相当)を前に小動きな展開が予想されていたが、月初から元高方向へのバイアスが高まり、全人代直前の3月4日には前月末対比およそ0.7%元高となる6.5045まで元高が進行した。

注目された全人代ではGDP目標の切下げ7.0%⇒6.5%〜7.0%、財政収支目標が▲2.3%⇒▲3.0%へ切り下げられ、また貿易量に関する目標が削除されるなど、景気先行き見通しへの不安感を煽るような内容となったが、為替相場への影響は限定的。17日のFOMCでは利上げ見通しが引下げられたこと等もあり、下落するドルに連れて元高が進行。一時前年12月と同水準となる6.45台まで元高が進行した。その後、元高の反動から元安方向に戻す局面も見られたが、月末にかけて再度元高バイアスが高まり、結局前月クローズ対比1.3%元高水準となる6.45台まで下落した。

【金利相場:流動性は安定した状況が継続も、月末にかけては金利上昇】
公開市場操作のレポ期日到来により、月初5営業日で100億元以上の資金吸収が行われたが、前月末に預金準備率の切下げ17.5%⇒17.0%(6,000億〜7,000億元程度の資金供給効果)を行っていたこともあり、翌日物SHIBORは2%を下回る水準での推移。しかし月末にかけては資金の出し手が限られている中、大手中資系が資金の取り手に回ったことや四半期末の影響等もあり市場流動性はタイトな状況、翌日物SHIBORは節目と考えられていた2.0%を上回る2.017%まで上昇した。

■ 今月の見通し

【為替相場】

当局が昨年12月から公表しているCFETSインデックスに沿った仲値の設定が継続しており、為替市場は安定して推移している状況。CFETSインデックスに沿った値動き≒他主要通貨の影響を大きく受ける状況が継続しており、今後人民元為替市場の動向を占う上ではグローバルな金融環境の変化に注目。目下の焦点は4月FOMCでの追加利上げの有無。先月イエレン議長から利上げは慎重に進めるべきとの発言もあり、4月FOMCでの利上げの可能性が低くなっている中、4月FOMCで追加利上げが決定されたとすると、大幅に人民元安が進むことが想定される。一方利上げが見送られた場合の元高余地は限定されるだろう。

【金利市場】

当局による市場安定化策は引き続き機能しており、市場流動性は安定している状況。しかしながら市場での資金の出し手は限定されており、需給動向には留意が必要。

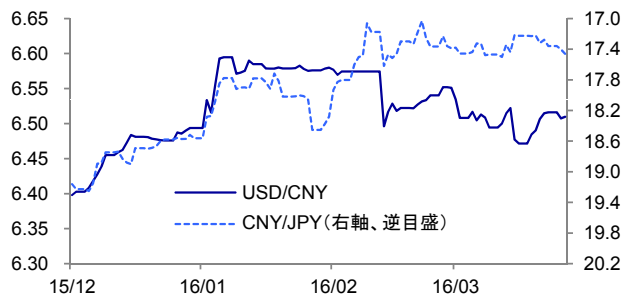
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

”びっくり料理”と言えば当地中国の専売特許ではないでしょうか。中華料理は『空を飛ぶものは飛行機以外、四足は机以外すべて食べる』と言われています。食材ではカエル料理はもちろん、ヒトデ料理、犬料理というの聞いたことがあります。筆者が食べた中で一番驚いた料理は鶏白湯ラーメンです。日本でも見かけるラーメンですが、中国では一味違います。もちろん鶏から出汁をとるのですが、出汁を取った鶏がそのままラーメンの具材として使われます。筆者が食べた鶏白湯ラーメンは鶏を丸々出汁として使っているようで、運ばれてきたラーメンの麺の上には鶏の頭がチョコンと乗り、こちらを見ていました。味は抜群に美味しいのですが、スープをすすする度に近づいてくる鶏の頭を遠くに押しのけるのは一苦勞。結局最後まで食べましたが、器の中に残ったのはスープに半分浸った鶏の顔。最初はかなり抵抗がありましたが、出汁が濃厚だからかクセになり、今では週1回は通うほどの常連に。鶏の頭を箸で動かないように固定してスープをすすするの慣れたものです。次はどんなびっくり料理にお目に掛れるかを楽しみに、今日も新しいメニューに挑戦しております。

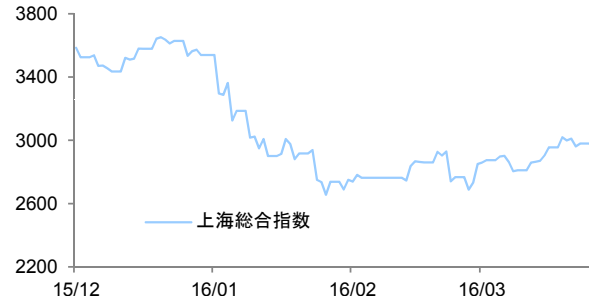
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	製造業PMI	2月	49.4	49.0	49.4
3/8	貿易収支 (USD)	2月	51.0B	32.6B	63.3B
3/8	輸出 (前年比)	2月	-14.5%	-25.4%	-11.2%
3/8	輸入 (前年比)	2月	-12.0%	-13.8%	-18.8%
3/10	CPI (前年比)	2月	1.8%	2.3%	1.8%
3/10	PPI (前年比)	2月	-4.9%	-4.9%	-5.3%
3/11	M2	2月	-3.1%	-4.8%	15.1%
3/12	小売売上高	2月	11.0%	10.2%	10.7%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3350 ~ 1.3750
SGD/JPY 81.50 ~ 84.50

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

3月のシンガポールドル(SGD)相場は、中国の追加緩和や原油相場の安定、米利上げが緩やかとの見方を背景とした新興国通貨買いの流れに沿って、対ドルで9か月ぶり高値を回復した。

2月29日に中国人民銀行が預金準備率の引き下げを発表。予想外の追加緩和を好感して、SGDは月初1.40台半ばで堅調に始まった。株式市場も世界的に急上昇し、新興国市場全体が浮上する中でSGDはその後も連日上昇。更に、4日の米2月雇用統計は非農業部門雇用者数が市場予想を上回る増加となったものの、一方で製造業の弱さが示されたため、米国は利上げ急がないとの見方からドル売りが強まった。この流れの中でSGDは年初来の高値を抜いて1.37台前半まで上昇した。

第2週は5連騰の後の利食いが出て週前半はSGDが反落し、一旦1.38台後半まで戻した。しかし10日に欧州中銀(ECB)が追加緩和を発表するとSGDは上昇に転じた。市場の期待を上回るECBの緩和自体が新興国通貨買い材料となった他、ドラギECB総裁が今後の追加利下げに否定的な見方を示し、SGDバスケット主要構成通貨であるユーロが急反発したこともSGD買いに繋がった。SGDは1.37台前半まで続伸して越週した。

第3週は米FOMCを週半ばに控えて、週前半は利食いでSGDが反落した。しかし16日、FOMCはイエレンFRB議長が「インフレ上昇は一時的」と述べ、またメンバーによる年末のFF金利予想が市場の予想より低目となるなど総じてハト派的な結果だったことから、SGDは再び上昇に転じた。17日には1.34台後半の8か月ぶり高値をつけた。

第4週は週後半にイースター休暇を控えて利食いからSGDが売り気度で始まった。更にその後も複数のFRB関係者が「4月の利上げも可能」との趣旨の発言を行ったことで早期利上げ期待も出たためSGDは連日下落し、25日には1.37台前半まで戻した。

しかしイースター明けは29日にイエレンFRB議長が「追加利上げは慎重に進めるのが適切」と述べたことを受けて早期利上げ期待が後退。再びSGD買いの流れとなり31日には9か月ぶり高値1.34台前半までSGD高が進んでいる。

■ 今月の見通し

4月のシンガポールドル(SGD)相場は、シンガポール通貨政策、米国の利上げについての思惑を材料に神経質な相場展開となる可能性もあるが、基本的にはレンジ取引を予想する。

シンガポール金融管理局(MAS)による定例の通貨政策見直しは4月上旬(7~14日頃)に予定されており、同時に発表されるシンガポール1~3月期GDP速報値と合わせて4月のSGD相場の最大の注目材料である。シンガポール経済は、中国経済の減速の影響で輸出が低迷しているものの、最大のリスク要因である金融市場の不安定化については、震源となった中国、原油市場が共に落ち着きを取り戻したため、シンガポール経済の下振れリスクは後退したと言えよう。2016年の予算案には内需刺激策も盛り込まれており、2016年のシンガポール経済は2.0~2.5%程度の成長を維持する見通しである。一方で、物価については労働市場の逼迫が続いている上、原油安や補助金による物価押し下げ効果の剥落からMASはインフレへの警戒を解いておらず、MASは現状の政策を維持すると思われる。ただ、MASがより緩和的な政策を採択するだろうと予想する市場参加者もいるため、現状維持が決定された場合は一時的にSGDが買われる可能性がある。

米金融政策については、FRBは利上げを急がないとの見方が一般的である。そのこと自体はSGD買い材料だが、SGD相場はそれを前提にすでに1月につけた約6年半ぶり安値1.44台から3月には1.34台まで反発した。3か月間の値動きとしては非常に大幅であり、また政策バンドの上限に接近しつつあると推測されるため、現水準からのSGD上昇余地は限られると見ている。一方、今後の米経済指標の結果次第では市場の予想する米利上げ時期が早まる可能性もあるが、いずれにしてもFRBの利上げペースは緩やかと思われるSGDの下値も限られそうだ。よって一時的に神経質な値動きとなる可能性はあるものの、基本的には1.34から1.37近辺のレンジ取引を予想する。

その他の4月の材料は海外要因としてはECB理事会(21日)、米FOMC(26~27日)、日銀金融政策決定会合(14~15日)、国内要因としては18日の輸出統計が注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

シンガポールは多民族国家ですので、多彩な料理があります。その中から私がびっくりした料理をいくつか挙げてみました。

シンガポール名物フィッシュヘッドカレーは鯛の頭を香辛料と共に煮るもので、日本人の中にも根強いファンがいます。目玉、鰭、骨までしゃぶるのが醍醐味。つわもの食べると最低限の残骸しか残りません。これはまあ序の口。

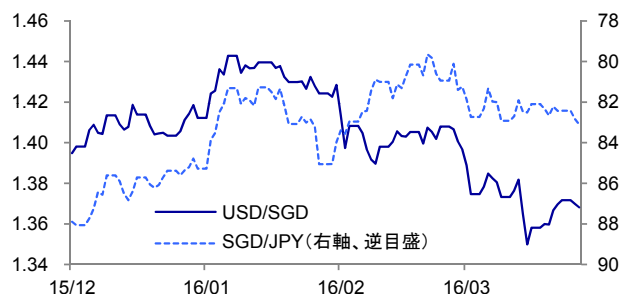
中華系のびっくり料理では蛙のお粥なんでものがあります。味はあっさりしていて美味しいですが、びっくりするのは下準備です。生きた蛙を押さえて足先を切り落とし、ペンチで皮をくりと一息で剥ぎます。あっという間に皮を剥かれた蛙の山が、、、

インド系の羊の骨料理というものもあります。骨の中にストローを差し込んで骨髓を吸い出すのです。どろっとした舌触りは覚えていますが、味は良く覚えていません。

マレー料理では串に刺した肉をあぶるサデーという料理が有名です。美味しいと評判のあるお店ではお婆さんが大鍋で秘伝のソースを煮ていました。友人によるとお婆さんは黒魔術を使うそうで、私は鍋の中にとんでもない物が入っているのではと恐々とし、とても味どころではありませんでした、、、(鈴木教子)

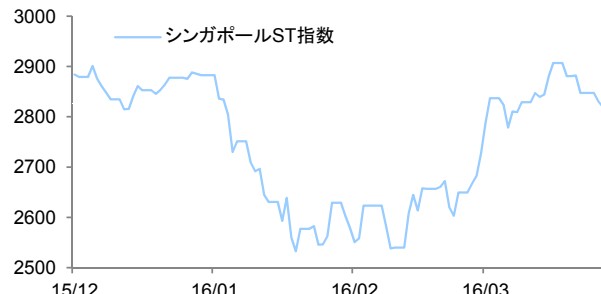
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/2	購買部景気数	2月	48.9	48.5	49.0
3/2	電子機器指数	2月	48.3	48.2	48.5
3/15	小売売上高(前年比)	1月	3.1%	7.5%	2.8%
3/17	非石油輸出(前年比)	2月	-0.8%	2.1%	-10.1%
3/23	CPI(前年比)	2月	-0.7%	-0.8%	-0.6%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.00 ~ 36.20
THB/JPY 3.10 ~ 3.25

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

●3月のドル/パーツは35割れまで下落した後、反発した。

上旬、ドル/パーツは下落。1日、2月消費者物価指数は前年比▲0.50%となり市場予想とほぼ一致。前日に中国人民銀行が預金準備率を引き下げたことを好感してリスクオンムードが高まる中、パーツを含めアジア通貨は全般的に買い優勢となると35.50台半ばまで下落する展開。3日に発表された2月消費者信頼感指数は2か月連続での低下となったものの、反応は限定的。高利回りを求める海外からの資金流入を背景にドルパーツは上値の重い展開が続き、2月中旬以来の35.20台まで下落した。タイ中銀のウイラタイ総裁は2016年の経済見通しを昨年12月時点での3.5%から下方修正することを発表。

中旬、ドル/パーツは続落。10日にドラギ総裁がECB理事会後の会見において更なる利下げに否定的な見方を示したことをきっかけにユーロ買いドル売りが優勢となるとドルパーツは35.20台前半まで値を下げた。サポートとなっていた35.20近辺を割り込むと35.00台まで一段安。14日にはソムキット副首相が「他の市場で金利が低下している以上、タイに資金が流入することは当然。」「このところのパーツ高を懸念する必要はない」と発言すると上値重く推移した。16日にはFOMCでメンバーの金利見通しが下方修正されたことを背景にドル売りが優勢となると、ドルパーツは昨年8月以来となる35パーツ割れとなった。タイ国債利回りは各年限でヒストリカルローを更新、ドル/パーツは18日に一時35.70近辺まで下落した。

下旬、ドル/パーツは大幅反発。FOMCを受けたドル売りが一服し、アジア通貨は全般的に弱含む展開。21日、海外時間に入りFED高官から4月の利上げに前向きな発言が伝わるとドル買いが優勢の展開。23日、MPCを控え、ドルパーツはショートカバーから35.00を抜け、市場予想通り政策金利1.50%の据え置きが決定されるとドル/パーツは一段高。その後もFED高官からのタカ派発言を受けて35.20台まで上値を伸ばした。MPCにおいて2016年の経済成長率見通しが下方修正されたことも材料視され、ドル/パーツは堅調に推移。25日に発表された2月貿易統計では輸出が14か月ぶりに前年同月比プラスとなるも、パーツ売りは続き、29日にかけて35.40台まで上昇した。しかしその後イエレンFRB議長の講演で利上げに慎重な見方が示されると月末フロアも相俟って35.10台まで下落した。

■ 今月の見通し

●ドル/パーツは底堅い展開を予想する。

足許のドル/パーツは、15～16日のFOMC後に昨年7月以来となる34.70台をつけた後、急速にドル買戻し優勢の展開となっている。FOMCにおいて金利見通しが下方修正(年内4回の利上げ→2回の利上げ)された直後こそドル売りアジア通貨買いが盛り上がったものの、勢いは続かず。月の後半に入り複数のFRB高官から4月の利上げの可能性が示唆されるなど、マーケットが過度に利上げ期待を後退させていることへの警鐘ともとれる発言が相次いでおり、マーケット全体でドル売りの流れは一服している。あくまでデータ次第というスタンスは変わらないであろうが、利上げ期待を高めるようなデータや要人発言に対しドル買いで反応しやすい状況は続くのではないかと。

一方、タイ国内景気に目を向けると、25日に商務省より公表された2月貿易統計では、輸入が前年比▲16.8%となった一方で、輸出は14か月ぶりに同+10.3%となった。ただし、金価格の上昇を背景とした金・宝飾品の輸出が全体の数字を押し上げた形で、依然弱い状態が続いている。同じく下旬に発表された2月の自動車販売台数も同▲10.7%となり、1月に引き続き税制変更前の駆け込み需要の反動から未だ抜け出せない状況が明らかとなった。足元の国内景気を反映し、23日に開催された金融政策決定会合(MPC)では市場予想通り全会一致で政策金利1.50%の据え置きが決定された。声明文では周辺国の景気落ち込みを背景とした輸出の低迷に言及するとともに、2016年の成長率予想は従来の3.5%から3.1%に下方修正された。中銀による金融政策の緩和余地は残されているものの、低所得者向けの低利住宅ローンが承認されるなど、政府から相次いで出されている景気刺激策の効果を見極めるステージであり、当面は金融政策の据え置きが濃厚か。以上、国内景気の弱さと米利上げプロセスの進行を踏まえれば、ドル/パーツは再び36台を視野に入れた緩やかな上昇方向を予想している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

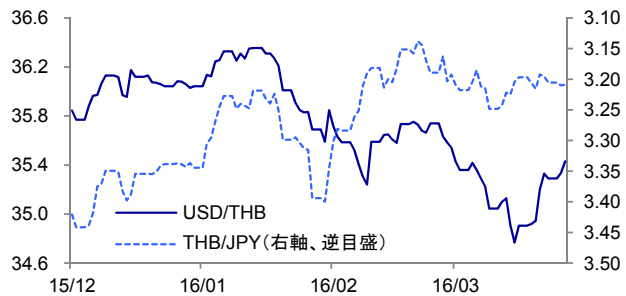
『当地のびっくり料理』

世界三大スープであるトムヤンクンをはじめ、タイスキ、パッタイなど日本人の口に合う料理がたくさん。在住の日本人が多いこともあって日本食のレベルも高く、生活していて食には困らないタイです。そんな中、どうしても苦手なのは「ルアツ・ムー」豚の血を固めたものです。見た目はレバーのようでもあり、プルプルです。カオマンガイに乗っていたり、スープに入れたり、炒め物に入れたりと用途はさまざま。豚の血は固めずスープに入れることもあります。血ということもあり、特に鉄分不足しがちな女性にはおススメの食材だそう。屋台などで食べるのが基本ですが、スーパーでもチューブのバックになって売られており、自宅でも気軽に食べられます。食べると、やはり血の味です。

私は自ら注文することは、まずありません。ある日タイ人スタッフとランチをした際、図らずも遭遇。隣に座っていた普段からクールビューティー彼女が、「ベリースペシャルワン...!」とつぶやきながら無表情で次々と奴を口に運ぶ姿は、少し魔女のようにも見えたのでした。何はともあれ、命を余すことなくいただくのは尊いことですね。タイにお越しの際はぜひお試しを。

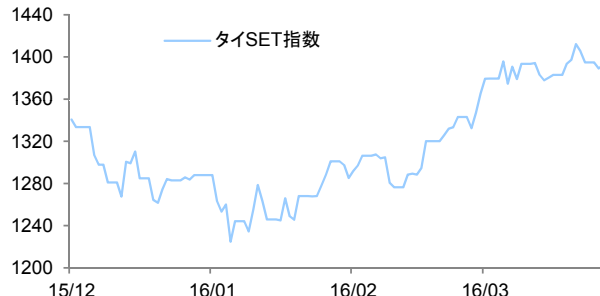
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	CPI (前年比)	2月	-0.51%	-0.50%	-0.53%
3/3	消費者信頼感	2月	-	74.7	75.5
3/23	政策金利	2月	1.50%	1.50%	1.50%
3/25	通関輸出(前年比)	2月	-8.75%	10.27%	-8.91%
3/25	通関輸入(前年比)	2月	-9.90%	-16.82%	-12.37%
3/25	通関貿易収支(USD)	2月	\$700M	\$4986M	\$238M
3/28	自動車販売台数	2月	-	57093	51821
3/29	製造業生産指数	2月	-3.1%	-1.6%	-3.5%
3/31	経常収支	2月	\$6100M	\$7401M	\$4066M

マレーシアリンギ相場

予想レンジ: USD/MYR 3.87 ~ 4.10
MYR/JPY 27.30 ~ 29.50

アジア・オセアニア資金部 松下 哲史

■ 先月の為替相場

1日、4.19近辺でオープン。主要産油国による原油増産凍結への期待を受けた原油価格反発を背景にマレーシアリンギは強含みの展開、4.14台まで買い進められる。その後は、中国の金融緩和政策もあり、市場におけるリスクセンチメントが回復、株式市場が底堅く推移するとマレーシアリンギは更に買い進まれ4.11台をつけた。4日、1月輸出・輸入が予想比悪化を示すとマレーシアリンギは若干の反発、結局4.13台でクローズした。

7日、4.11台でオープン。相場のリスクオンの動きの中、原油価格が底堅く推移すると、資源国通貨は総じて上昇。マレーシアリンギは4.07台中盤と7か月半振りの水準をつけた。9日、利食いの売り優勢に原油価格が軟調に推移すると、マレーシアリンギは更に売り込まれて4.13台中盤まで下落。マレーシア中銀による金融政策が発表され、3.25%現状維持が示されるも相場への影響は限定的。11日、原油価格上昇がマレーシアリンギを下支えすると、結局4.09近辺でクローズした。

14日、4.09台でオープン。イベント待ち相場の中、イランの増産凍結に対する否定的な見解が示されると原油価格は急落、マレーシアリンギも連れ安。15日、OPECにより原油供給量の増加予想が示されると現物需給の観点から原油価格は更に下押し、マレーシアリンギも4.13台中盤まで売り込まれる。17日、米国FOMCの結果を受けた米ドル売り優勢地合いにマレーシアリンギは急伸、大きく買い進まれて4.06を割れた。18日、米ドル売り相場が続き週高値圏4.03台をタッチすると、若干の巻き戻しが入り、結局4.06近辺でクローズした。

21日、4.06台でオープン。主要産油国の増産凍結と米国次回利上げタイミングへの思惑で上下駆け引き、市場参加者も少なく小動きの展開。22日、中国鉄道会社によるマレーシアへの大規模投資が報じられると、マレーシアリンギは急伸し7か月振りの水準4.00を割れた。23日、米利上げに対する思惑が米ドル選好を呼び戻す市場下も、原油価格の高値圏推移を背景にマレーシアリンギは足許の高値を更新し3.95台をつける。24日、イースター休日を控えて若干巻き戻し、結局4.02近辺でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のリンギ相場は、原油相場、海外投資家の動きに注意を払いつつ、もう一段のリンギ高相場の可能性も視野に入れておく必要がある。

まず外部要因としては、米FRB高官からの利上げに関してタカ派的な発言やベルギーでのテロ事件などがあるものの、リンギ相場への影響は限定的となっており、リンギのリスク感度は弱まっているものと思われる。

一方で、2016年に入り、リンギは7%以上の値上げをする等、東南アジア地域で最も買われている通貨となっている。主な要因としては、原油相場の持ち直しがあげられ、主要産油国での増産凍結に向けた期待感が高まる中で、WTIIは節目の40ドル台を約3か月ぶりに上回っている。しかし、直近は、高値警戒感から上値も重くほぼ横ばい推移を続けており、今後の、原油相場の動きには、留意が必要となろう。

今後の更なる一段高を期待するには、1月にあったとみられる海外投資家の投資マネー流入がカギとなろう。米長期金利が低下する中でシングルAを有するマレーシア国債の妙味が増していくのか、海外投資家の動向には注意を払いたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

マレーシアでびっくりする料理、調理法というのは私の感覚が鈍いだけなのかもしれませんが、恐らくないんじゃないでしょうか。一応、蟻塚の中にいる女王蟻が栄養価が高く、一部の金持ちが食しているという話があるようですが、少なくとも一般的ではないと思います。

そういった中で敢えて挙げるとすれば、

1.マレー料理で生野菜を見掛けることがほぼない(但し、添え物的なきゅうりは除く)。勿論、和食屋やイタリアン等に行けば生野菜は提供されていますが、マレー料理、中華料理、インド料理で生野菜をふんだんに使うサラダのようなものがないが故に、生野菜を食べる習慣がないのだと思われます。

2.ハラル認証取得済の牛丼が、全くアルコールを使わない調理方法なのにそれを全く感じさせず、言われなければ気付かないレベル(個人差はあると思いますが)。

3.アルコールを置いていないマレー料理屋のソフトドリンクが、怪しい色をしていて、期待を裏切らないほど味が薄く飲むとがっかりする(少なくとも美味しいと言って飲んでいる日本人を見たことなし)。

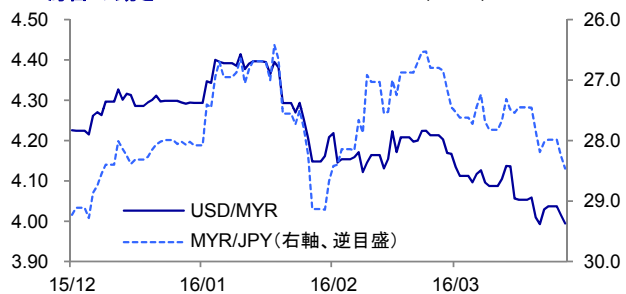
くらいでしょうか。

和食屋でランチを頼むとかなりの確率で茶碗蒸しが出てくる、魚といえば鮭、気付けば鶏肉ばかり食べている、等はマレーシアに限らず、アジアではだいたい同じような気がするので、上の3つということで今回はお願いします。

(マレーシアみずほ 山田)

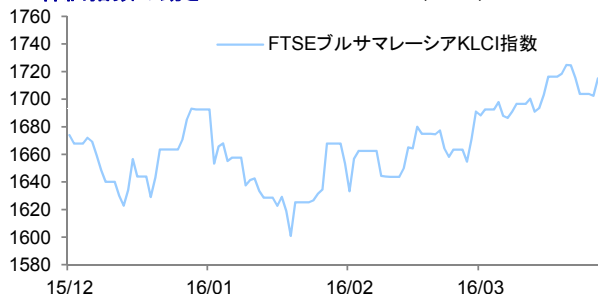
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/4	輸出 (前年比)	1月	2.5%	-2.8%	1.4%
3/4	輸入 (前年比)	1月	4.9%	3.3%	3.2%
3/4	貿易収支 (MYR)	1月	7.60Bio	5.39Bio	7.99Bio
3/9	金融政策決定会合	-	3.25%	3.25%	3.25%
3/25	消費者物価指数 (前年比)	2月	4.10%	4.20%	3.50%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13200 ~ 13600
 IDR/JPY 0.82 ~ 0.87
 JPY/IDR 114.80 ~ 122.50

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介
 アジア・オセアニア業務部 小泉 聡

■ 先月の為替相場

3月のドル/ルピアは13000割れを試すも、月末に上昇(ドル高・ルピア安)する展開に。

月初1日のドル/ルピアは13350付近でスタートし、中国人民銀行の預金準備率引き下げを受けた新興国経済への先行き懸念後退から、海外からの資金流入が活発となり、4日には13100付近までルピア高が進行。

その後14日には13000割れを試すも、同水準は底堅く、株式市場での利益確定売りや、米FRBのタカ派的発言も相まって、月末にかけてルピア軟調の流れとなった。結局ドル/ルピアは13300台後半(3月29日時点)と月初付近の水準まで値を戻している。

17日に開催されたインドネシア中銀定例会合では、事前予想通り利下げを決定し、政策金利(中銀ターゲットレート)は6.75%とした。今年1月以来、3か月連続での利下げとなったが、利下げ決定後の市場の反応は限定的となった。

■ 今月の見通し

今月はルピアやや軟調の展開を予想。

ドル/ルピアは先月中盤に13000付近まで下落(ドル安・ルピア高)するも、節目の13000は割れず、その後はルピア下落基調が続いた。然る相場状況を見る限り、年初より続いてきたルピア高基調は潮目を迎えた可能性もあるだろう。

また、今年1月以降の連続利下げにより(計0.75%)、確実にルピアと米ドルの金利差は縮小しており、慢性的な経常赤字に鑑みれば、ルピア高要因を見出しにくい。

先月下旬に、インドネシア財務相が「更なる利下げ余地がある」と発言したが、為替市場においてルピアが軟調となれば、今年以降続いてきた利下げも一旦様子見に転じる可能性もありそう。今までのように、利下げがインドネシア経済底上げに寄与しているといったポジティブな見方はされないかもしれない。

引続き、ルピアは証券投資の動向に振られる展開が予想されるため、日・米・欧の金融政策動向や、リスクオン・オフの流れは押さえておきたいところだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

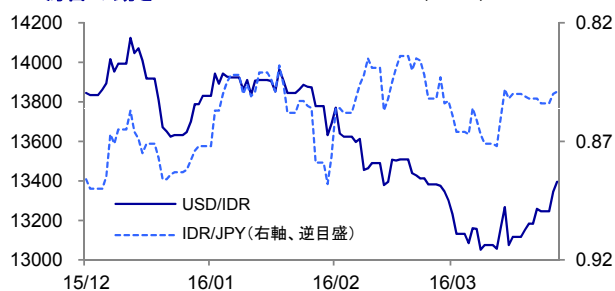
ジャカルタ市内北部の中華街に行くと、路上でコブラの生き血を販売しています。

実際飲んだことはありませんが、路上でコブラを絞めている姿は迫力満点です。

また、中華屋に行くと、カエルのフライを良く見ます。メニューの写真を見てもカエルと判別できず、料理が運ばれてくるとカエルと認識することも多々ありますが、中々の美味です。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	CPI(前年同月比)	2月	4.36%	4.42%	4.14%
3/7	外貨準備高(USD B)	2月	-	104.54	102.13
3/15	貿易収支(USD M)	2月	100	1,136	51
3/17	インドネシア中銀ターゲットレート	3月	6.75%	6.75%	7.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 45.90 ~ 47.00
PHP/JPY 2.40 ~ 2.50

マニラ支店 杉山 泰憲

■ 先月の為替相場

2月末に発表された米GDP改定値が良好で米経済への懸念が和らぐとリスクセンチメントが回復。原油価格も上昇し資源国通貨を中心に新興国通貨が堅調に推移。中国人民銀行の預金準備率の引き下げも、新興国経済の先行き懸念を和らげることになり、ドル/ペソもその流れに乗ってペソ高推移。1日(火)は47.44ペソで取引を開始し、その後47.35ペソ、2日(水)は47.23ペソ、3日(木)は47.07ペソまでと断続的にペソ高となり、4日(金)には1月以来の46ペソ台まで下げて、46.945ペソで越過となった。

翌週は7日(月)に46.83ペソで取引を再開。前週末の米3月雇用統計が強い内容ながら週間時給が前月比マイナスになったことをインフレ圧力の減退として米利上げ観測が遠のき、原油価格の上昇も手伝ってアジア通貨は対ドルで強含みの展開となった。ドル/ペソもペソ高の展開で揉み合いながらもドル低下基調をたどり、9日(水)には46.84ペソ、10日(木)は46.695ペソまで下げて年初来のペソ高値をつけた。翌11日(金)も46.60ペソまで下げて46.62ペソでの越過となった。

14日(月)からの週も原油価格の上昇を好感してリスクオンの雰囲気でもペソ高水準の46.50ペソから14日(月)の取引を開始。この日は46ペソ半ばでの取引となる。しかし同夜イランが生産調整に消極的な姿勢を見せ原油価格が下落すると、リスク回避のドル買いから15日(火)は46.83ペソ、16日(水)は46.93ペソまでのドル高に。しかし16日のFOMCで米利上げ観測が遠のく結果となると17日(木)は一気にペソ高となって46.36ペソまで、18日(金)もその勢いのまま46.15ペソまで下げたのち、週末のショートカバーで戻して46.36ペソで越過。

21日(月)は46.45ペソからの取引。ホーリーウィーク前も引き続きペソ高基調で22日(火)には46.17ペソまでペソ高となるも、23日(水)は46.40ペソまで戻して休日入り。週明けの28日(月)はFRB高官の利上げ示唆発言からドル強含みとなり、46.30～40ペソレベルでの推移となっている。

■ 今月の見通し

5月9日(月)が投票日となるフィリピン大統領選挙。この日は大統領のみならず上院の半分、下院の全部を含めて、あらゆる階層の公選ポジションが選挙される日。日本で例えるなら衆参同時に加えて、都道府県知事、都県議会議員から市長、市議会議員選挙が同日に行われるに等しいわけですから、その規模がいかに大きいかがわかります。

したがって、あらゆる階層での選挙運動が繰り広げられることになり2016年に入ってマネーの動きが非常に活性化しているようです。通常1月や2月はクリスマスを終えて、消費活動が一旦は落ち着くものですが、たとえば日系二輪メーカーの1月販売台数は前年比+37%増、2月も前年比+32%増という異常な売れ行き。日系自動車メーカーでも2月は前年比+21.7%の伸びという好調ぶり。5月に向けてますますフィリピン国内の消費活動が活性化していくことになりそう。

こうした国内消費に支えられたフィリピン経済の好調ぶりは、何ものなればペソ高・ドル安としてドル/ペソ為替レートに反映されるべきではあるものの、他のアジア通貨同様に外的な要因に左右されやすい。3月は米利上げ観測が後退し、原油安も一応の落ち着きを見せていることから3月は46ペソ台での推移となっている。

しかしたとえ米利上げ観測が後退しても、一本調子にペソ高が進むには大統領選挙の不透明感が強すぎる。46ペソ台前半から47ペソ台後半に至るレンジでの取引が当面続くものと考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

外観のインパクトという点では、セブ地方の名物料理である「レチョン」というブタの丸焼きが、それなりにびっくり料理です。セブ市内では、いろいろな屋台みたいな小さな店に、串刺しされたブタがぐるぐる回っていますので、インパクトはあると思います。

しかし、外観以上にインパクトがあるのは、その不味さ。

普通に塩とこしょうで丸焼きにすれば、肉自体のうまみがにじみ出てくる、それだけでおいしい料理になるはずが、正体不明の油(きっと、ココナツオイル)と香辛料？を付け、さらに食するときのグレイビーソースのようなものも不味い。

バリバリに焼けた皮が一番おいしい、特に首根っこ、しっぽの根元は子供に大人気、ということで、北京ダックのような感じなのだと思いますが、私には皮の部分が一番まずい。

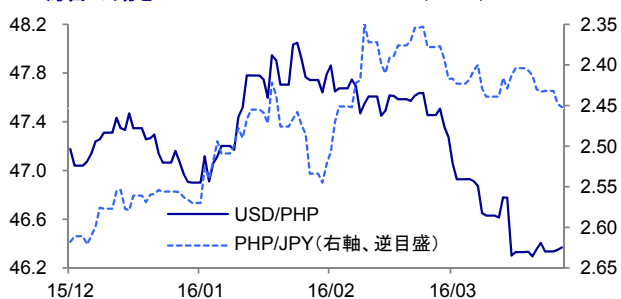
なにゆえ、わざわざこんなに不味く作るのか、私にはまったくわかりませんがフィリピンのハレの日の食卓には必ず供される、みんな大好きレチョン。

しかし不味い、おいしいは個人の感性の問題。私個人の味覚の問題かもしれません。

ぜひフィリピンの、特にセブにお越しの際はお試しあれ。

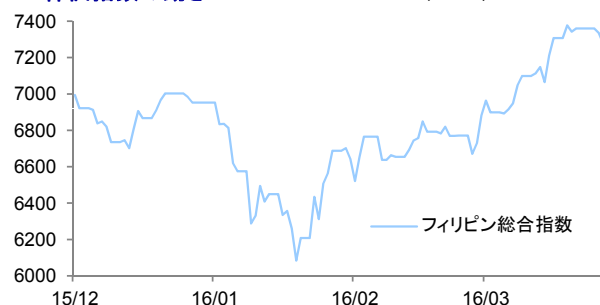
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/4	CPI (前年比)	2月	1.3%	0.9%	1.3%
3/7	外貨準備高	2月	-	813億ドル	807億ドル
3/10	輸出 (前年比)	1月	0.4%	-3.9%	-3.0%
3/11	失業率	1月	-	5.8%	5.6%
3/15	OFW送金 (前年比)	1月	3.5%	3.4%	4.9%
3/18	総合国際収支 (USD)	1月	-	-316M	-813M
3/23	貿易収支 (USD)	1月	-160M	-2,638M	603M
3/23	BSP O/N Borrowing Rate	-	4.0%	4.0%	4.0%
3/23	BSP SDA Rate	-	2.5%	2.5%	2.5%

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 66.00 ~ 68.50
INR/JPY 1.63 ~ 1.74

アジアオセアニア資金部 中野 博明

■ 先月の為替相場

2016/17年度予算案が2月末に発表。財政悪化への不透明感が後退したことを受けて3月のルピー相場はルピー高が大きく進行する結果となった。

2月29日に、インド政府は2016/17年度(16年4月～17年3月)予算案を発表。財政赤字目標が下方修正されると予想されていたものの、前回発表時の対GDP比▲3.5%を堅持。これを受けてインドルピーに買い戻しが入る展開となった。

1日に68近辺から取引を開始したドル/ルピーはじりじりと67近辺まで下落した。その後は、67台前半での取引が継続した。

16日、FOMCにて米利上げが見送られ、FRBメンバーの政策金利見通しが予想よりも大きく引き下げられると、ドルが下落し、新興国通貨が全般に大きく上昇。ドル/ルピーも66台前半まで下落した。

しかしながら、21日以降は相場が反転。米国の各連銀総裁から4月利上げの可能性が言及されたことに加え、22日にはベルギー・ブリュッセルにて同時テロが発生すると、リスク回避ムードが進行。ドルが上昇する展開にドル/ルピーも67近辺まで上昇した。

その後は主要市場が休場し、ドルが軟調に推移する中、ルピーは値を戻し、ドル/ルピーは66台前半まで再び下落している。

■ 今月の見通し

4月のルピー相場は、ルピー安進行を予想。

2月末に発表された予算案は財政目標こそ堅持したものの、公務員賃金引き上げ勧告に対する予算配分は6～7割と部分的であり、今後追加支出が発生する可能性があることに留意しなければならない。また、歳出側の補助金改革は実行されず、減少分は主に燃料補助金であるが、これは原油価格の下落が要因である。原油価格及び公務員賃金引き上げにかかるリスクは増大しており、今後も予断は許さない予算案となった。

インフレ率は予想を上回って低下しており、食料品価格も落ち着いていることから、インド準備銀行(RBI、中央銀行)による利下げの可能性は上昇。次回4月の利下げを予想する。

しかしながら、原油価格に持ち直しの動きがあり、これまで原油価格下落を背景に低下してきたインフレ率も、ベース効果が薄れ、今後はインフレ率の反転が懸念される。

米国サイドはここにきて再び各連銀総裁が利上げの可能性に言及しており、市場が安定してくると利上げ議論が再び持ち上がってきている状況。このような状況ではルピーの一方向の上昇はやはり望みづらく、ポジション調整或いは買い戻しの動きは見られても、メインストリームにはならないと予想。当面は現状推移またはややルピー安を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり料理』

さて困った。

インドのびっくり料理などまったく思い浮かばない。菜食主義の多い国に、何とかの丸焼きやら踊り食いなどないのである。

びっくりはともかく珍味くらいと思って、常日頃ノンベジを標榜しているくせに、旅行土産を渡した途端「これはベジ？」とベジタリアンに瞬間変身してしまう、食に保守的な人々には珍味もない。

珍味はなくとも突出したものはないのかと調べてみたところ、ありました。

2007年2月に世界一辛い唐辛子としてギネス認定された「ブート・ジョロキア」。北インドのアッサム州、ナガランド州、マニプル州の品種である。

2004年の報告では、ハバネロの約二倍の辛さだとか。ちなみに食用としてより薬用等に使われているとのこと。スパイスフードに慣れているインド人すら食用にしない唐辛子とは、そもそも口に入れることすらできないのではなかろうか。

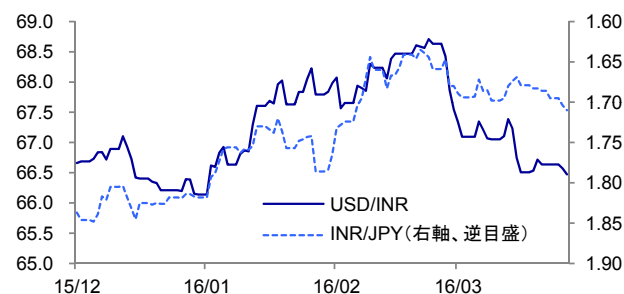
しかし、インド人も口にしないこのジョロキアを勇敢にも食した人々がおりました。

スナックに加工してですが、「大魔王ジョロキア」として、日本の某お菓子メーカーがかつて販売していたそう。現在は終売となっているそうだが、「大魔王」という名を冠したこのスナック。食べてみたかった。いえ、インド人に食べさせてみたかった。もしかして気に入ったかもしれない。

(チェンナイ支店 近藤)

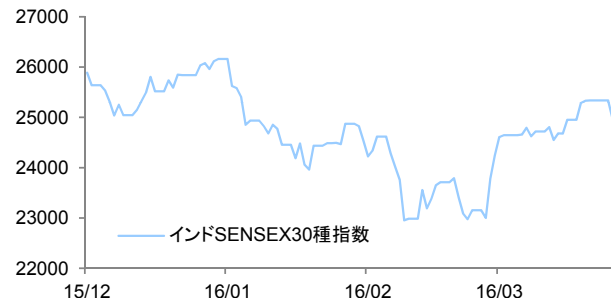
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

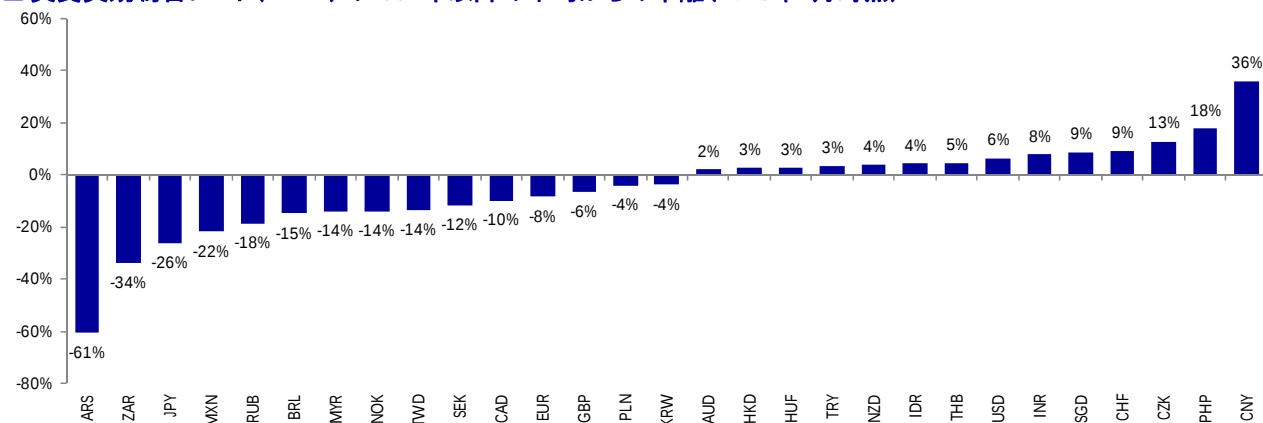
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	日経インドPMI製造業	2月	-	51.1	51.1
3/3	日経インドPMIサービス業	2月	-	51.4	54.3
3/3	日経インドPMIコンポジット	2月	-	51.2	53.3
3/11	鉱工業生産(前年比)	1月	-0.5%	-1.5%	-1.2%
3/14	消費者物価指数(前年比)	2月	5.52%	5.18%	5.69%
3/14	卸売物価(前年比)	2月	-0.19%	-0.91%	-0.90%
3/15	輸出(前年比)	2月	-	-5.7%	-13.6%
3/15	輸入(前年比)	2月	-	-5.0%	-11.0%
3/15	貿易収支	2月	-\$ 6.8B	-\$ 6.5B	-\$ 7.6B

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年3月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年3月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	17685.09	1.5%	-
日本	USD/JPY	120.22	112.57	-6.4%	日経平均株価	19033.71	16758.67	-12.0%	-6.0%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.138	4.8%	ドイツDAX指数	10743.01	9965.51	-7.2%	-7.2%
英国	GBP/USD	1.4736	1.436	-2.6%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	6174.9	-1.1%	1.5%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7657	5.1%	S&P/ASX200指数	5295.9	5082.785	-4.0%	-8.7%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.3004	-6.0%	S&PTロント総合指数	13009.95	13494.36	3.7%	10.4%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.4536	-0.6%	上海総合	3539.182	3003.915	-15.1%	-14.6%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7572	0.1%	香港ハンセン	21914.4	20776.7	-5.2%	-5.3%
インド	USD/INR	66.1537	66.2475	0.1%	インドSENSEX30種	26117.54	25341.86	-3.0%	-3.1%
インドネシア	USD/IDR	13788	13239	-4.0%	ジャカルタ総合	4593.008	4845.371	5.5%	9.9%
韓国	USD/KRW	1175.06	1143.42	-2.7%	韓国総合株価	1961.31	1995.85	1.8%	4.6%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	3.8995	-9.2%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1717.58	1.5%	11.8%
フィリピン	USD/PHP	46.905	45.97	-2.0%	フィリピン総合	6952.08	7262.3	4.5%	6.6%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.3484	-4.9%	シンガポールST	2882.73	2840.9	-1.5%	3.7%
台湾	USD/TWD	32.862	32.212	-2.0%	台湾加権	8338.06	8744.83	4.9%	7.0%
タイ	USD/THB	36.03	35.126	-2.5%	タイSET	1288.02	1407.7	9.3%	12.1%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年2月時点)



■ 実質GDP成長率

	2014Q2	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	4.6	4.3	2.1	0.6	3.9	2.0	1.4	2.4	2.4
日本*	-7.9	-2.5	2.2	4.6	-1.4	1.4	-1.1	0.0	0.5
ユーロ圏	0.8	0.8	1.0	1.3	1.6	1.6	1.6	0.9	1.6
英国	3.0	2.8	2.8	2.6	2.4	2.1	1.9	2.9	2.2
豪州	2.7	2.6	2.2	2.2	2.0	2.7	3.0	2.6	2.5
カナダ*	3.5	2.1	3.4	-0.9	-0.4	2.4	0.8	2.5	1.2
エマージングアジア									
中国	7.4	7.1	7.2	7.0	7.0	6.9	6.8	7.3	6.9
香港	2.1	3.1	2.5	2.4	2.9	2.2	1.9	2.6	2.4
インド	7.5	8.3	6.6	6.7	7.6	7.7	7.3	7.2	
インドネシア	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	4.7	5.0	5.0	4.8
韓国	3.5	3.4	2.7	2.4	2.2	2.8	3.1	3.3	2.6
マレーシア	6.5	5.6	5.7	5.6	4.9	4.7	4.5	6.0	5.0
フィリピン	6.7	5.5	6.6	5.0	5.8	6.1	6.3	6.1	5.8
シンガポール	2.6	3.1	2.8	2.7	1.7	1.8	1.8	3.3	2.0
台湾	4.2	4.3	3.6	4.0	0.6	-0.8	-0.5	3.9	0.8
タイ	0.8	0.9	2.1	3.0	2.7	2.9	2.8	0.9	2.8

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	15/08	15/09	15/10	15/11	15/12	16/01	16/02	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.1	5.1	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	6.2	5.3
日本	3.4	3.4	3.2	3.3	3.3	3.2	3.3	3.6	3.4
ユーロ圏	10.7	10.6	10.6	10.5	10.4	10.3		11.6	10.9
英国	5.4	5.3	5.2	5.1	5.1	5.1		6.3	5.4
豪州	6.1	6.1	5.9	5.8	5.8	6.0	5.8	6.1	6.1
カナダ	7.0	7.1	7.0	7.1	7.1	7.2	7.3	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国		4.1			4.1			4.1	4.1
香港	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.2	3.3
インドネシア	6.2							5.8	6.0
韓国	3.6	3.5	3.4	3.5	3.5	3.5	4.1	3.5	3.6
マレーシア	3.2	3.2	3.1	3.2	3.4	3.4		2.9	3.2
フィリピン			5.6			5.8		6.8	6.3
シンガポール		2.0			1.9			2.0	1.9
台湾	3.8	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	3.8
タイ	1.0	0.8	0.9	0.9	0.7	0.9	0.9	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	15/08	15/09	15/10	15/11	15/12	16/01	16/02	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	0.2	0.0	0.2	0.5	0.7	1.4	1.0	1.6	0.1
日本	0.2	0.0	0.3	0.3	0.2	0.0	0.3	2.7	0.8
ユーロ圏	0.1	-0.1	0.1	0.1	0.2	0.3	-0.2	0.4	0.0
英国	0.0	-0.1	-0.1	0.1	0.2	0.3	0.3	1.5	0.0
豪州		1.5			1.7			2.5	1.5
カナダ	1.3	1.0	1.0	1.4	1.6	2.0	1.4	1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	2.0	1.6	1.3	1.5	1.6	1.8	2.3	2.0	1.4
香港	2.4	2.0	2.4	2.4	2.5	2.7	3.1	4.4	3.0
インド	3.7	4.4	5.0	5.4	5.6	5.7	5.2	6.4	5.9
インドネシア	7.2	6.8	6.3	4.9	3.4	4.1	4.4	6.4	6.4
韓国	0.7	0.6	0.9	1.0	1.3	0.8	1.3	1.3	1.3
マレーシア	3.1	2.6	2.5	2.6	2.7	3.5	4.2	3.2	2.1
フィリピン	0.6	0.4	0.4	1.1	1.5	1.3	0.9	4.1	1.5
シンガポール	-0.8	-0.6	-0.8	-0.8	-0.6	-0.6	-0.8	1.0	-0.5
台湾	-0.4	0.3	0.3	0.5	0.1	0.8	2.4	1.2	-0.3
タイ	-1.2	-1.1	-0.8	-1.0	-0.9	-0.5	-0.5	1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q2	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2014	2015
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.1	-2.1	-2.2	-2.3	-2.4	-2.6	-2.7	-2.3	-2.7
日本	-0.1	-0.1	0.5	1.6	2.3	2.9	3.3	0.5	3.3
ユーロ圏	2.0	2.3	2.4	2.6	2.9	3.0	3.1	2.4	3.1
英国	-4.8	-5.0	-5.1	-5.3	-5.3	-5.0	-5.2	-5.1	-5.2
豪州	-3.6	-3.3	-2.9	-3.4	-5.2	-4.6	-5.2	-3.0	-4.6
カナダ	-2.5	-2.3	-2.3	-2.7	-3.0	-3.3	-3.3	-2.3	-3.3
エマージングアジア									
中国	1.5	1.8	2.7	3.3	3.3	3.1	3.1	2.7	3.1
香港	2.1	1.5	1.3	1.3	2.6	3.1	3.1	1.3	3.1
インド	-1.0	-1.2	-1.4	-1.3	-1.3	-1.2	-1.1	-1.4	-1.1
インドネシア	-3.2	-3.0	-3.1	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-3.1	-2.1
韓国	6.2	6.1	6.0	6.7	7.0	7.7	7.7	6.0	7.7
マレーシア	5.7	5.3	4.4	3.5	2.7	2.5	3.0	4.4	3.0
フィリピン	3.1	3.6	3.8	4.2	3.8	2.9	2.9	3.8	2.9
シンガポール	17.9	18.5	17.4	19.1	19.4	19.2	19.7	17.4	19.7
台湾	11.9	11.9	12.2	13.3	13.3	14.3	14.6	12.2	14.6
タイ	2.6	2.2	3.8	4.5	6.0	7.9	8.1	3.8	8.1

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2015/12/17	25	2016/3/17	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/3/15	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/3/10	-5bp
英国	バンク・レート	0.50	緩和: 2007/12/6	5.75	2009/3/5	-50	2016/3/17	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	2.00	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/2/3	-25	2016/3/1	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/3/10	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.75	緩和: 2015/1/15	8.00	2015/9/29	-50	2016/2/2	現状維持
インドネシア	翌日物金利	6.75	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/3/17	-25	2016/3/17	-25bp
韓国	7日物レポ金利	1.50	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/11	-25	2016/3/10	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2010/3/4	2.00	2014/7/10	+25	2016/1/21	現状維持
フィリピン	翌日物金利	4.00	引き締め: 2014/7/31	3.50	2014/9/11	+25	2016/3/23	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/2/23	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行